

# せい か ほう まさ 星 火 方 正

ほうまさ  
～燎原の火は方正から～

松田ちゑさん逝く 享年 96 歳

中国側の証言を求めて―「満蒙開拓平和記念館」調査訪中報告

方正地区と伊漢通の開拓民避難状況記録

「満州」に渡った私たち―繰り返してはならない怨念の連鎖―

「虫の目」ではなく「鳥の目」で考察を！

満鉄会の解散について

奥村 正雄

寺沢 秀文

高橋 健男

名取 敬和

矢吹 晋

天野 博之



長春市南関区平陽街にある「中日友好楼」

日本人孤児を育ててくれた中国人養父母のためにと、かつて長春に住んでいたことのある日本人・笠貫尚章氏(東京出身)の寄付により 1986 年に建築された 3 階建てのアパート。最多時には養父母 32 世帯が暮らしていたが現在は、93 歳の養母・崔志栄さん(93 歳)が住むのみで、今は一般所帯も多数入居している。

### なぜ方正（ほうまさ）なのか？

方正と書けば日本人なら「ほうせい」と呼ぶのが普通だろう。しかし黒龍江省には宝清という県があり、旧満洲にいた日本人たちは、「ほうせい」と呼ぶ場合は宝清を指した。その宝清と区別するために、方正を音訓混じりで敢えて、「ほうまさ」と呼び、今でもそう読んでいる。戦後も彼の地で過ごした人々にとって方正はあくまでも「ほうまさ」なのである。私たちが彼らの思いを受けて、会の名称を「方正友好交流の会」とした。<sup>ほうまさ</sup>

### なぜ『星火方正』（せいかほうまさ）なのか？

星火とは、とても小さな火のことである。私たちの活動も今は小さな野火にすぎないが、やがて「燎原の火のように方正から平和と人類愛的な友愛の精神が広まるのだ」という意味を込めて会報の名前にした。

## 星火方正（第 22 号） ～燎原の火は方正から～

### 目 次

|                                                     |        |    |
|-----------------------------------------------------|--------|----|
| 松田ちゑさん逝く 享年 96 歳<br>—獄中 3 年、死刑から無罪へ—                | 奥村 正雄  | 1  |
| 中国側の証言を求めて—「満蒙開拓平和記念館」調査訪中報告                        | 寺沢 秀文  | 4  |
| 方正地区と伊漢通の開拓民避難状況記録                                  | 高橋 健男  | 9  |
| .....                                               |        |    |
| 「虫の目」ではなく「鳥の目」で考察を！<br>—中国大陆からの引き揚げを巡って—            | 矢吹 晋   | 15 |
| 満鉄会の解散について                                          | 天野 博之  | 21 |
| .....                                               |        |    |
| 「満州」に渡った私たち<br>—繰り返してはならない怨念の連鎖—                    | 名取 敬和  | 23 |
| 祖国に帰らぬ残留婦人たち<br>—その孤独な心を撮る—                         | 千島 寛   | 27 |
| 再び戦争をしないために戦争法（安保法制）廃止を！<br>—「満蒙開拓団」の経験を踏まえて改めて今思う— | 石橋 辰巳  | 29 |
| 残留孤児の体験記を日中両国語で本に 池田澄江さん                            | 五味 洋治  | 32 |
| 戦後 70 周年平和記念<br>満州開拓団の悲劇『声なき氷像』公演を終えて               | 飯牟礼 一臣 | 33 |

|                                               |        |    |
|-----------------------------------------------|--------|----|
| 自ら刺したトゲに＝徐士蘭の背負った悲劇＝                          | 奥村 正雄  | 36 |
| 奉天（瀋陽）、大連での子供時代を振り返って<br>——つれづれ思い出すまゝ＜満州覚書＞—— | 篠原 浩一郎 | 38 |
| .....                                         |        |    |
| 三橋文子さんの手紙                                     | 川合 継美  | 43 |
| フィリピン・ミンダナオ島から引き揚げた私                          | 丹野 雅子  | 45 |
| .....                                         |        |    |
| 周恩来と国際主義的精神 第3回                               | 大類 善啓  | 48 |
| .....                                         |        |    |
| ——「方正友好交流の会」へのお誘い——                           | 編集部    | 56 |
| ご報告及び、書籍案内を兼ねた編集後記                            | 大類 善啓  | 57 |

## 松田ちゑさん逝く 享年96歳

—獄中3年、死刑から無罪へ—

奥村正雄

2月29日、外出から帰宅した私は、ルスロク（留守録）を聞いて、わが耳を疑った。  
「松田ちゑの孫です。おばあちゃんが亡くなりましたのでお知らせします」

松田ちゑさんの孫娘・幸子さん（40歳）が知らせてくれた電話だった。

そんな？！…昨年暮れも押し詰まった12月29日、息子・崔鳳義さん（68歳）に電話して松田さんの様子を聞いた時も、「いつものようにデイサービスに行ってるよ」という答えだった。  
一昨年の暮れから正月にかけては体調を崩して入院までしたのだったが、今年は元気だと聞いて安心していただけなのに…

信じられない思いで私は、その場に立ち尽くした。  
ふと気がつくと、次のルスロクが話し続けていた。これを聞き直した。

「明日6時から通夜をやります。高島平の駅へ車で迎えに行きますので、駅に着く時間を知らせてください」

これは旧知の武田正志さんからの電話だった。松田さんと同じ中国・黒竜江省方正県からの引き揚げ者で、都内で建設業を営み、業績を伸ばしている男性だ。

ようやく平静に戻った私は長野の吉田敬子さんに電話した。

彼女は松田さんとの付き合いが私よりずっと長く、1970年代からというから、もう半世紀近くも松田さんと親交を重ねてきた女性である。彼女も長野から上京し、通夜に駆けつけることになった。



祭壇に飾られた遺影

### ■なぜ？ 突然？

それにしても…なぜ、突然、松田ちゑさんは逝ってしまったのか！…明日、崔さんに会えば、すべてがわかることだが、日本へ来て、もう日常生活は長くなったとはいえ、母親の急死にあたって、通夜、葬儀をどう処理したらいいか、日本へ来て初めて経験する冠婚葬祭の習慣に戸惑い、身近にいる町内会の役員にでも相談しているだろう…それとて日常会話とは違う日本語と生活習慣を知るのに戸惑っているだろう。そんな緊急時に、彼に電話をかけるわけにはいかない…私は何も手につかず、ただ「どうして…？」「なぜ急に？」という疑問の周辺を堂々巡りし続けていた。

あとで崔さんに聞いたところによると、松田さんの最後の生と死は次のような経緯だったという……

2月26日（金曜日）いつものようにデイサービスへ行って夕方帰宅。

デイサービスセンター『なごやか・ときわだい』の記録によれば；

「本日も笑顔で来所され、午前中に入浴しました。午後のレクリエーションでは「箱積み」を行ない、結果はビリでしたが、よく頑張っておられました。

活動 機能訓練、塗り絵、体操、カラオケ

体温 35.9、脈拍 81、血圧 125/68  
要介護 5

松田さんの体に異常が現れたのはデイサービスも休みだった 2 月 27 日（土曜日）午後 5 時。突然、松田さんは体の異常を訴え、驚いた息子夫婦は、自分たちが住んでいる 10 階建て都営住宅の 1 階にある診療所へ連れて行った。診断は「左大腿骨頸部骨折」。だが、松田さんの体の異常は、それだけではなかった。「急性循環不全」、その原因となった「糖尿病ケトアシトシス」。松田さんの体はもう生命の限界まぎわに来ていたのだった。その体調異常を感じながら、松田さんは、毎日の日課であるデイサービスを、前日まで休もうとはしなかった。

## ■やっと手にした安息

通夜は 3 月 1 日、午後 5 時 45 分、自宅から歩いて 10 分たらずのところにある高島平霊園の会館で行われた。祭壇正面に桜花をバックにした松田さんの遺影、その左右に 20 人ほど、名入りの供花、正面前に松田さんの柩、それを囲む花の垣根。50 人ほどの会葬者が詰めかける中、真言宗の僧侶による読経が流れた。そこへ入り口から、30 人ほど、作業服姿の会葬者が入ってきて後部の席に着いた。松田さんの妹分で、一緒に中国から帰国した那須増枝さん（故人）の息子たちが経営する建設会社の関係者で、現場からかけつけたのだった。

戦前から戦後にかけて、そして戦後も長い間、松田さんは日本へ帰れずに中国で苦労が続いた。詳しくは『星火方正』次号（第 23 号、今年末発行）でレポートする予定だが、いよいよ 96 年の人生を閉じようというこの時、自分の体がもう、そこまで限界に来ていたことにも歯を食いしばっていたのだろうか！？ 私は柩の中で静かに目を瞑る松田さんの顔を見ながら、無言で、松田さんに語りかけ続けた。

「あなたが、やっと、辿りついた安息の時なんだね！　どうかゆっくり休んで！」

ふと我に返った私の耳に、読経を終えた僧侶のもっともらしい「法話」が空しく聞こえてきた。

「96 歳という、珍しい長寿を全うされました」

私は胸の中で叫んでいた。

<違うよ！　いまや、享年 100 歳を超える死者なんて珍しくない時代になっているじゃないか？　ましてこの故人は実質 300 年ほどの人生を終えたところなんだ！>

祭壇に飾られた花束の名札に「那須」姓のものがいくつかあった。私には、松田さんにつながる大事な人達から贈られたものであることが、すぐわかった。その詳細もまた、本誌で後日、伝えなければならない。通夜に私と吉田さんを駅まで迎えに来てくれた武田さんの大きな花束も飾られていた。

静かな嗚咽が広がった。祭壇の柩の小窓が開けられ、孫たちが松田さんに語りかけては泣いているのだった。その嗚咽が収まるのを待って、私も松田さんのそばへ行った。一段と小さくなった顔で松田さんは眠っていた。

「やっと休めるね。長いこと、お疲れ様でした」

目の前で眠る松田さんにかかる最後の言葉は、これしかなかった。

翌 3 月 2 日、同じ場所で午前 11 時から告別式が行われた。戒名「寿香宝珠信女」となった松田さんの柩の中には、顔の周りにのど飴、帽子、マフラーが入れられ、遺体の周りには、あふれるほどの花が入れられた。柩の蓋が閉められた時、また、ひとしきり嗚咽が広がった。

## ■花筏に乗って

霊柩車の助手席に乗った息子・崔さんの胸に抱かれた遺影、その後部の柩に横たわる遺体。その霊柩車のあとに遺族や私たちが乗るマイクロバス、マイカーが従った。火葬場はすぐ近くにあった。型通りの儀式を行い、遺体を乗せた台車に従って私たちも竈の前まで進み、最後のお別れをした。

40分ほどの後、わずかなお骨となった松田さんが私たちの前に現れた。型通りの作法で骨壺へ。最後に入れた頭骸骨の上に、生前、松田さんが愛用した二つの老眼鏡が入れられた。冥途で松田さんは、元気な頃に、いつも書いていた詩を作るのに、このメガネが要るのかもしれない。この後、49日間、松田さんの遺骨は自宅に安置され、その後、すでに10年前に購入したという、近くの墓地に入ることになる。

自宅へ帰る松田さんと別れ、私たちは車に分乗して10分ほど走り、1軒の中華料理店に入った。どこにもある、30人ほどが腰かけるテーブルと、靴を脱いで入る、掘りごたつ式のテーブルと、二つに分かれて座った。お世辞にも高級感など、少しもない、街のどこにもある中華料理店だ。だが、ビールが運ばれ、次から次へと、限りもなく出て来る中国料理が、どれもうまい。私の右隣に松田さんの嫁・閻永革さん(66歳)、左がその長女・松田幸子さん(40歳)、奥に、遠くは山形・天童から来た松田さんの甥と都内や近くに住む松田さんの実の弟妹たち。9人きょうだいの最年長だった松田さんには弟が4人と妹が4人いる(うち2人死亡)。うち、代理を含め6人が奥の席で昔話に盛り上がっていた。

松田さんの曾孫や孫娘の婿、那須さんの息子や武田正志さんの顔も見えた。これだけのグループを結束させたのも故人だったのだと、私は酔いながら感慨無量だった。

それから2週間後の3月15日、私は松田さんの遺骨が49日間安置されている高島平の自宅を訪ねた。松田さんは生前、3DKの自宅の4畳半のベッドで起居していた。そのベッドが取り払われ、そこにしつらえられた、小さな祭壇に松田さんの遺骨は、遺影とともに安置されていた。

「あとは49日の納骨を待つだけだね」

私は無言で松田さんに語りかけ、香にマッチをすった。

くいつか訪ねた時も、この時期だったね、その水路の橋を渡る時、下の水面に桜の花筏が浮かんでいたっけ>

あの花筏が、あと1か月ほどで、また、この橋の上から見られるだろう。

(おくむら・まさお：1931年、新潟県生まれ、婦人雑誌記者、フリーライター、赤帽などを経て現在、本会事務局参与。胃がん、腹部大動脈瘤などの病歴もある。)

# 中国側の証言を求めて

(「満蒙開拓平和記念館」調査訪中報告)

寺沢秀文 満蒙開拓平和記念館 副館長・専務理事  
(本会理事)

## 1. 二度目の調査訪中へ

昨年10月10～14日の5日間と短期間ながら、満蒙開拓平和記念館による旧満州への調査訪中を実施した。当記念館としては一昨年6月実施の第1回調査に続く2回目の訪中調査である。

今回の調査訪中の主たる目的は3つ、1つ目は前回にも実施したものの不十分なままに終わってしまった現地農民等中国側の生の証言の収録に再度取り組んでみることに、2つ目は当館との交流を深めている中国側の民間ボランティア団体「ハルピン市養父母連絡会」との交流、特に同会がハルピン市内の「731部隊陳列館」にて常設展示している「中国養父母展」の日本国内展示に向けての実務的な打ち合わせ等を行うこと、そして3つ目は現地の開拓団跡地等を訪問し、比較的若い皆さんの多い記念館スタッフ等に、かつて満蒙開拓団の人たちが暮らした場所を実際に見てもらおう中で、今後の活動の参考として欲しいということであった。

満蒙開拓関係者等からの証言の聞き取りについては、当記念館では定期的な「語り部の会」(原則月2回)の開催と共に、これらの元満蒙開拓団員や中国帰国者等の証言をビデオ収録し、これを開館以来、記念館内の常設セミナールールで常時放映している。開館後3年が過ぎ、その第二弾の作成を行う時期となり、今回は日本側からの証言だけではなく、当時、日本人開拓団と接触のあった中国農民など現地の方の生の声も収録し、これを実証材料として活用していきたいと考えてきた。当記念館では満蒙開拓団の悲劇、苦難、涙など「被害」も語り継ぐも、その被害を招いた原因としての「加害」という面にもきちんと向き合っていかななくてはならないということを基本スタンスの一つとしている。それ故にこそ、元開拓団員や残留邦人等の日本側の声だけでなく、当時、日本人開拓団員が入ってきた時の思い等、中国現地の方からの生の声もお聞きし、残していかななくてはならないと思っていたからである。

## 2. 中国側からの聞き取り証言の重要性と意義

日本人に使われた中国農民等の証言記録等は日本側や中国側の研究者等によって、これまでも少なからず資料化等されている。また、私自身もこれまでの20回以上に及ぶ私費での旧満州への現地調査等の中でも、そういった声を直接聞いてきた。特に一番最初に旧満州に行った1996(平成8)年、この時は当時比較的活発に活動していた「満州研究会」(清川紘二会長)の学者の皆さんによる現地調査に同行し、この時初めて、かつて両親が住んで

いた吉林省の「水曲柳」開拓団のあった舒蘭市水曲柳鎮も訪ねた。この時、研究会の学者の皆さんと共に現地の小学校の教室に5～6人の老人たちに来てもらい、ここで通訳を介しての聞き取りを行った。かつて、日本人開拓団員の小作人として使われていたことのある老人たちであった。老人たちは当時のことを「日本人に土地を取られて悲しかった、口惜しかった」と語っていた。今、思えば、それをビデオ収録しておくべきであったのに、当時はまだ映像記録として資料を残すという意識が乏しく、老人達の写真は一杯撮ったのに、ビデオや録音テープなどに収録しなかったことは実に惜しまれる。

あれから歳月が過ぎ、そして、満蒙開拓平和記念館を開館してみて、改めて思うのは、そういった中国側の農民たちや中国側の生の声もきちんと残しておくべきということである。それは、記念館が伝える「満蒙開拓」の「被害」と「加害」の両面を伝えるためにも必要な証言であり、またそういった生の声を記念館の運営に携わるスタッフやボランティアの人たちにも直接聞いておいて欲しいということもあった。記念館内でガイドするスタッフのほとんどは戦後生まれや満蒙開拓とは直接関係の無い方が中心となりつつある。そのような人たちにとって、当時の様子を展示ガイド等の中でより実感的に伝えていくためには、やはり当時の体験者から直接聞いた生の声が一番の材料となる。元日本人開拓団員らの語り部からのお話は沢山聞いているものの、中国側の人々からの直接の生の声を聞いていないスタッフらは、「中国側の人たちに対しても被害を与えた史実でした」と具体性を持って説明等していくためには、比較的若い彼ら、彼女ら自身に直接、生の声を聞いておいて欲しい、そんなこともあつての中国側からの証言聞き取りの取り組みであった。今回は一昨年の経験等から、訪中前から何度も現地との連絡を取り、日本人開拓団と接触のあった地元民3～4人、また日本人残留孤児を育ててくれた養父母2名の方からの聞き取りを出来る予定にて中国へと旅立った次第であった。

### 3. 現地での証言の聞き取り等

今回の訪中団は当方を団長として9名、記念館関係者と共に、元開拓団関係者、また若手研究者の方なども参加された。また、昨年に続き、南誠長崎大学助教（本会理事）に現地合流して頂き、今回もコーディネーター、通訳等としても多大なご協力を頂けたことは誠に心強いことであった。

我々一行はハルピンに到着した10月10日の午後、早速、ハルピン市郊外の旧天理村開拓団のあった村を訪ねた。今も「天里屯」という当時の名前を残すこの村で、日本人と接触のあった現地の農民の方からの証言をお聞き出来るというはずであった。しかし、現地に行ってみてお会いできたのは、この村の元村長で、かつてここにいた日本人開拓団と接触のあった人たちからの話を伝え聞いているという1943年生まれの現地住民の男性の方だけであった。やや出鼻を挫かれた感はあるが、ここでは、かつての天理教教会の建物が今も現存していたこと、また集落内にはかつて日本人開拓団員が建てたという古い住居がたった1棟だけ残っており、そこに今も住んでいる中国人の方のご好意で住居の中を見せて頂くことが出来たのは幸いであった。

2日目、我々はハルピンから方正公墓のある方正県へと向かい、ここで再び現地の方から当時のことをお話しして頂く機会をセットして頂いた。来て頂いたのは84歳の女性と

80代の男性のお二人。女性の方は親族の方が日本人と接触があっただけということであったが、もう1人の88歳という農民の男性の方は、実際に当時、日本人開拓団が入ってきてから住居を他に移されたという体験をしているとのことであり、大変そのお話の内容に期待したが、残念ながら、いざ聞き取りの場に出て警戒してしまわれたのか、また前日まで病院に入院していたため体調不良ということ等にて、ほとんど核心のお話を聞けないままに終わってしまったのは大変残念であった。

#### 4. 中国養母からの聞き取り

旧天理村、また方正での聞き取りはほぼ不発気味で終わってしまったものの、ハルピンに再び戻ってからの中国養母お二人からの聞き取りは大変内容の濃いものであった。3日目の午後、ハルピン市内でお話を伺ったのは、今年88歳になるという李淑蘭さんという老女性であった。李さんとは一昨年の第一回調査訪中時にもお会いしお話をお聞きしていたが、今回は記念館で流す証言ビデオ収録を撮らせて頂くために再度お話をお聞きした次第であった。ご自宅にお伺いし、終戦直後の秋に幼い日本人の女の子を引き取った時の下り、またその子が成長してから日本に永住帰国すると言った時の育ての親としての李さんの心情等をお伺いした際には、インタビュアー役の記念館の三沢亜紀事務局長（彼女の前職は地元ケーブルテレビの記者兼アナウンサーであった）も途中から涙が止まらず、聞き手役を代わったほどであった。

4日目にはハルピンから中国高速鉄道で長春まで足を伸ばし、市内にあるあの「中日友好楼」を訪ね、ここに住む養母の崔志栄さんからお話をお聞き出来た。日本人残留孤児の永住帰国等により生活難に陥った中国養父母の生活の支援のためにと、日本人篤志家・笠貫尚章氏の寄付により1986年に建てられたというこのアパート「友好楼」にはかつては30人以上の中国養父母が暮らしていたそうであるが、現在ここに住まわれている養父母は93歳になるというこの崔志栄さんだけになってしまったとのことであった。中国農民からの聞き取りは今回もほぼ不発に終わってしまったものの、日本人孤児を育ててくれた養母お二人のお話は大変貴重な証言であると同時に日本人として忘れてはならない大切な体験談でもあり、これらをも納めた証言ビデオ「それぞれの満州・パート2」はつい先頃完成し、現在、記念館内のセミナールームで常時上映されている。

#### 5. 河野村開拓団訪問と未認定孤児と養母来日の後日談

今回の訪中ではこれら聞き取りの他、長春郊外に長野県下伊那郡の旧河野村から入植していた河野村開拓団の跡地を訪問することが出来た。この開拓団は集団自決の唯一の生き残りとして記念館で語り部が続けられている久保田諫さんという方がおられた開拓団でもあり、またその送出母村の若き村長が戦後、その責任を感じ自ら命を絶ったという戦後談もあるなど、満蒙開拓は現地に渡満した人だけでなく送り出した側の立場の人など多くの人々の人生を左右した史実でもあったということを考えさせられる開拓団でもあり、ここへの訪問もまた意義深いものとなった。また、今回の調査訪中時に、日本人残留孤児と主張されながらもその認定を受けることが出来ずにいる未認定孤児の方お二人との面会、聞

き取りも行われた。字数の関係で詳細は省くも、今回も大変お世話になった「ハルビン市養父母連絡会」では養父母の支援等と共に、こういった未認定孤児の支援等も行っており、同会では現在13名の未認定孤児の支援を行っていると言う。当方も一昨年、そして今回の訪中時にそのうちの3名の方にお会いし、いろいろとお話をお伺いした。当方は厚生労働省から「中国残留未判明肉親調査員」を委嘱されているも、この調査員はあくまで日本人残留孤児と認定されながらも、その肉親等が未判明の場合にそれを民間サイドから調査等するための制度であり、このような未認定孤児については調査対象外となるため、あくまで個人的立場としての調査しか行い得ず、また認定されない背景等の複雑な事情等にも直面したり等、歯痒い思いもしている次第ではある。

## 6. 「養父母展」の日本開催と養母の来日等の後日談

冒頭でも触れたが、今回の訪中では前述の養父母会がハルビンの731部隊陳列館で展示している「養父母展」の日本国内での開催の実務的打ち合わせ等も行われた。731部隊陳列館は昨年8月に大きな新館が完成している。ここの旧館(かつての731部隊の本部建物)内で展示されていた実物を一昨年の訪中時に目にし、何とかこれを日本国内でも展示実現をと願い、同会の胡曉慧会長等とも何回も相談等する中で、1年以上をかけて日本国内開催がようやく実現出来たことは誠に幸甚であった。この展示を記念館だけではなく、全国での巡回展とするために、まず手始めに関東方面のどこかで開催をと模索していたところ、幸いにも、東京会場の受け入れを方正友好交流の会が引き受けてくれ、11月11日より1週間、都内にて先行して開催することが出来た。

この養父母展はその後、当記念館でも約1ヶ月間の展示を実施したが、その際には、実際に養母の方とこれを支援する養父母連絡会の方に来日して頂き、そのお話を直接、日本国内でお聞きしようというイベントも実現することが出来た。来日されたのは昨年12月中旬、前述の養母の李淑蘭さんとその実娘の方、そして養父母連絡会の役員等の皆さんであった。その招聘費用は記念館と飯田日中友好協会とで折半負担した。しかし我々が用意できた滞在期間の旅費等は4日間分のみ、本当はもっと日本国内を観光等して頂けるだけの旅費等用意出来れば良かったが、民間運営である当記念館等で負担出来る額には限界もある。本来ならば、このような招聘費用は国費等公費でと思うもなかなかそうはいかないのが現実である。しかし、このような支援や招聘等も誰かがしなくてはならない。誰かがしなくてはならないならば、誰かがやってくれるだろうではなくて、まずは自分でやらなくてはならない。日本人孤児を引き取り育ててくれた養母の李さんが来日時の記念館でのパネルディスカッションの中で言っていた言葉、「私が育ててやらなくては誰がこの子を育てるのだ」という思い、それはやはり「まずは私がやらなくては」という思いからであった。私たちの記念館もまたそんな思いで建てられた。そんな意思ある人々の思いや行動の中で様々な営みが繰り返され、歴史が積み重ねられているのだということを改めて思う。こういった過去を知るための、そして過去から学ぶための新たな取り組みのためにも、記念館では今後も何とか調査訪中を続けていくつもりである。

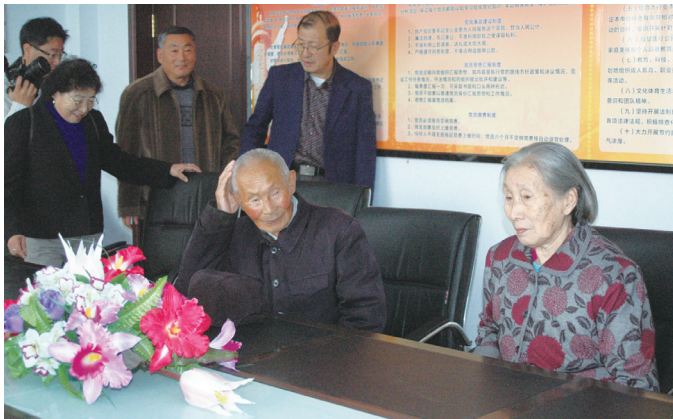
## 調査訪中写真



養母・崔志栄さん（後列右4番目、中日友好楼で）



旧天理村開拓団に今も残る天理教教会



方正で現地老人から聞き取り



養母・李淑蘭さん（後列中央）の聞き取りを終えて

（てらさわ：ひでふみ：1953年生まれ、不動産鑑定士の傍ら「満蒙開拓平和記念館」を開設に導く。長野県松川町在住。本会発足時から理事として活動）

# 方正地区と伊漢通の開拓民避難状況記録

高 橋 健 男

## 1 「北満農民救済記録」とは

元北海道新聞記者でノンフィクション作家の合田一道氏によって報告された「北満農民救済記録」は、満州移民研究者にはよく知られた貴重な記録、歴史資料である。「ソ連軍の侵攻や中国人の蜂起にさらされて逃避行を続けた開拓団が、やっと哈爾濱<sup>ハルビン</sup>に到着し、日本人居留民会に届けた記録」（合田氏）である。

1977（昭和 52）年夏、日中友好帰国者援護会と日中友好手をつなぐ会北海道支部主催の「満州開拓団・義勇軍終戦時犠牲者 33 回忌法要」の折に、札幌市在住だというある老人が、主催者・柴田正雄氏に古びた 7 冊のノートを手付した。老人ならびに資料の出所・所持経緯等は聞かない、詮索しないという約束で柴田氏が受け取った。柴田正雄氏は合田一道氏に、「ノートをもとに開拓団の“最期”をまとめてほしい」と依頼した。合田氏は緻密な取材を重ねて『満州開拓団 27 万人 死の逃避行』（1978）をはじめとする四部作を物し、記録の報告者や開拓団の避難・難民状況の実際を詳細に私たちに提供した。

合田氏は著書『死の逃避行』の冒頭で、「出てきた幻の『北満農民救済記録』とその発見・入手経緯を説明する。一度は政府に送り受け取る所管先がないとして返送されたノートは、その後合田氏が保管することになった。現物は、「33 年の歳月を経て表紙はかなりすり切れ、中の紙も茶褐色に変色してしまっている」状況だった。しかし、「ここにとどめられている数々の記録は、栄光の拓氏ともてはやされた満蒙開拓団の最後を綴る恐るべき生と死の葛藤であり、異郷に果てた死者の魂の叫びであった」（同書エピローグ）のである。

「北満農民救済記録」の内容とは、1945（昭和 20）年初冬から翌年夏にかけて旧満州国の哈爾濱市難民収容所および哈爾濱市周辺の収容所に避難した各満蒙開拓団の代表者、あるいはそれぞれの難民収容所の代表者が哈爾濱日本人居留民会農民部に提出した、避難状況や難民生活状況の報告書ならびに嘆願書である。それを誰かがノートに書き写し、誰かによって混乱の満州から日本に持ち帰られたものらしい。ただし、「ノートには赤鉛筆で一冊一冊番号書きされているのだが、奇妙なことに NO1 だけではなく、NO 2 から NO8 まで」の 7 冊が存在していた（同 15 ページ）。合田氏はこう書くが、表紙の数字は「1」か「7」か、判別は微妙である。

散逸した NO1 のノートには、興安総省やチチハル方面から避難した開拓団関係の報告書が収録されていた可能性が大だが、詳細は分からない。また、NO6 のノート（吉林省方面関係）の 5～24 ページが鋭利な刃物で切り取られていることが分かった。

## 2 筆者の「北満農民救済記録」入手経緯

筆者は 2008（平成 20）年、合田一道氏に直接依頼し、自著『新潟県満州開拓史』に引用するために「北満農民救済記録」中の新潟県開拓団関係報告書のコピーを入手した。合田氏の四部作にそれらが収録されていなかったからである。「北満農民救済記録」内の各報告書は、戦後作成・報告された「開拓団実態調査表」および全国拓友協議会がまとめた『満洲開拓史』の内容と重なる部分もあるが、特に昭和 20 年の越冬期間中の開拓民の状況を生で知り得る資料である。筆者は自著『新潟県満州開拓史』（2010）ならびに『渡満とは何だったのかー東京都満州開拓民の記録ー』（2013）に関係記録を引用・収録することができた。

筆者は『星火方正 12 号』で元<sup>ハタホ</sup>哈達河開拓団在満国民学校教師・岩崎スミさん（北海道夕張郡在住）を紹介した。そして、『星火方正 20 号』では岩崎さんの手記「野ざらしの骨」を紹介した。

筆者は岩崎さんを 2 回、北海道に訪ねている。2 回目の訪問の折、「北満農民救済記録」の全コピーを見せられた。岩崎スミさんが持っていたコピーは、札幌在住の男性が 2004（平成 16）年 8 月、合田一道氏から全資料を借り受けてコピーしたものである。その男性は二部コピーし、一部を岩崎スミさんに寄贈していた。筆者は、それを借り受けて再コピーした。ここに掲げるノートの写真は、寄贈主の男性が撮影したものである。



「北満農民救済記録」ノート

「北満農民救済記録」のコピーの入手とともに、前後して興味深い関連情報を得た。北海道の友人が、2013（平成 25）年 8 月 9 日付の北海道新聞（夕刊）の記事コピーを送ってくれた。それは合田一道氏の寄稿文で、表題が『「北満農民救済記録」－札幌の慰霊祭に供えられた謎／教師に託した逃避行の足跡」とあった。1977 年にある老人が「詮索しない」約束で世に出したこの記録の出自・経緯が分かったという内容である。

それによれば、ノートは哈爾濱日本人居留民会の大塚讓三郎農民部長の指示で、住田勝彦ら数人が開拓団からの報告書を集めてノートに記録した。1946（昭和 21）年春、大塚氏はノートを携えて満州から北朝鮮へ脱した。ノートは誰かに預けたが、その後は不明。その後、朝鮮半島で教師をしていた“ある老人”（明治 41 年生まれ、帰国後山形と北海道で教職を続けた）の手に託された。1977（昭和 52）年、老人（当時 69 歳）はそれを慰霊祭に届けた。「持ち帰ると約束して預かりながらどこへ持っていけばよいかわからないまま時が移り、申し訳ない気持ちでいっぱい」（合田氏）届けたようだ。届けた事実は本人の日記に記録されており、家人がそれを見つけて合田氏に連絡、幻だった部分が判明したという。

筆者のコピー入手と同じころ、東京の塚原常次氏が「北満農民救済記録」を復刻・自費出版した。塚原氏は 2011（平成 23）年暮れに札幌に合田一道氏を訪ね、ノートを借り受け、2014（平成 26）年 9 月、貴重な記録を残すべく自費で復刻・頒布した。

ここで合田氏著書の記録、塚原氏の復刻記録、そして筆者が入手した記録の 3 種類を比較してみる。筆者が入手したコピーはノートの端が少し欠け気味になっているページがあったり、ボケ気味のコピーになっているページがあったりする。その点塚原氏の復刻本は、印刷の専門家によるコピーらしく、すべて鮮明で、B5 版の現物大での復刻で見やすい。合田氏の四部作に収録されている記録文は、氏の断り書きによって、ある開拓団記録に関しては記録の一部のみのものがある。また、まったく原文通りというわけではなく、読みやすく意味も取りやすいように、氏が語句・表現に多少の改変を加えているものがある。さらには、これは不注意と思われるが、原文の部分脱落（例えば 1 行抜け落ち）や不鮮明部分の読み取り違いが発見される。正確に全記録を参照できるのは、今のところ塚原氏の復刻本である。

### 3 「北満農民救済記録」に収録された開拓団等

8 冊のノート（ただし、NO1 は欠落。注：塚原氏は「NO7 が欠落」とする）に書き写された報告書の内容は次の通りである。カッコ内は開拓団数を示す（地名のルビは省略）。

- NO2 浜江省関係： 哈爾濱市 (3)、阿常県 (7)、賓県 (2)  
NO3 浜江省関係： 珠河県 (9)、葦河県 (7)  
NO4 北安省関係： 慶安県 (8)、通北県 (8)、嫩江県 (1)、綏稜県 (4) 克東県 (1)  
浜江省関係： 五常県 (2)  
NO5 東安省関係： 密山県 (6)、虎林県 (2)、宝清県 (3)、勃利県 (5)  
牡丹江省関係： 寧安県 (9)、穆稜県 (2)  
黒河省関係： 孫克県 (4)、 北安省関係： 嫩江県 (1)  
NO6 三江省関係： 樺川県 (3)、通河県 (7)、方正県 (2)、湯原県 (6)、依蘭県 (3)  
NO7 吉林省関係： 舒蘭県 (5)、 興安総省関係： 布特哈旗 (1)

(ノートの 5~24 ページが切り取られている。ノートの最初に記載されている目次によれば、興安総省と龍江省関係のものが掲載されているようだが、そこにも県名や開拓団名が 1 個しかなく、詳細はまったく不明)

- NO8 義勇隊訓練所関係 (9)： 哈爾濱市礎嚮導訓練所 (浜江省)、満鉄尚家訓練所 (同)、一面坡訓練所 (同)、哈爾濱訓練所 (同)、三江青年義勇隊訓練所 (三江省)、東寧訓練所 (牡丹江省)、対店訓練所 (北安省)、二井訓練所 (同)、孫呉訓練所 (黒河県)

#### 4 「方正方面日本難民避難状況」と「伊漢通開拓団農民避難経過調査」の原文紹介

方正友好交流の会に直接関係する「北満農民救済記録」は、表題の 2 報告書である。報告書の地の文はすべてカタカナ書きだが、ここでは読みやすさを考えてひらがな書きに直した。表現や旧漢字は原文通りである。なお、句読点の追加を行い、ルビを付した。ただし、読み方不明のものもある。ご容赦願いたい。

合田一道氏の著書収録の報告書は、「方正方面日本難民避難状況」については原典の 9 割 5 分方が収録されているが、「伊漢通開拓団農民避難経過調査」については約半分の収録である。以下のものはいずれも原典のままである。原典は縦書きだが、ここでは横書きで紹介する。

### 方正方面日本難民避難状況

昭和 21 年 2 月 25 日

連絡者 方正方面責任者 清水智恵喜  
湯沢昌志

#### 一 治安状況

1 月下旬頃までは当地保安隊の一部が極めて素質悪く、作業の邪魔、衣服の掠奪<sup>りやくだつ</sup>、最後には女の強姦<sup>ごうかん</sup>等目に餘るものあり。その日の眠りも儘<sup>まま</sup>ならざりしが、2 月上旬、哈爾濱<sup>ハルビン</sup>方面より来た八路軍<sup>はちろ</sup>の為、保安隊は武装解除せられ、悪きものは銃殺せらる等、軍の为一掃せられ、最近治安急激に良好となり、日系に対する取計<sup>とりはから</sup>い等も非常によく、久方ぶりに枕を高くして眠りにつくことが出来得た、と言われており、現地方正県も一変せられたり。

#### 二 寝具及び衣服状態

衣服及び軍より配給せられた毛布等も全部掠奪<sup>まさ</sup>せられ、薪取り<sup>むしろ</sup>作業等にも困難を来している状態なり。明日も知れぬ重病者が簾<sup>むし</sup>の上に簾をかけて休み、それも一人平均一枚半位の割合なり。その上<sup>いしや</sup>醫者なく、薬なく、栄養取る術なく、崩れかけた開拓団家屋に半ば放任の状態にして、重病者は日に増し倒れ行く状態なり。

#### 三 食糧問題

主食高粱<sup>こうりやん</sup>のみにて、その他なし。

#### 四 燃料問題

部落中、二、三は豊富なりしも、以上述べたる状況にして困難なり。

#### 五 部落分散状況

第一部落の方正県興農合作社水利組合事務所は、将来中国人国民学校にする為、八路軍より立退き命令があり、2月中旬明渡し完了せり。

第四部落は伊漢通埠頭部落の中国人に追われ掠奪に逢い、強制的に満系に強いられ、1月下旬部落構成全く成らず、解散の狀態に落入り、残員は第二部落に引上げたり。

#### 六 結論

去年9月避難以来、凡ゆる方法を以て治安問題、帰郷問題を絶叫すれども、右記に述べる如くにして目的達成せず。最近八路軍より帰農を奨めらるゝも、食うに食なく、着るに衣なく、住むに家なく、満嫁増加するばかりにして、現在生き残りし者は現地帰農希望全く無く、一日も早く都市近くの日本人集参せる方面に移動することを、全員希望せり。一部經濟の許せる者は哈爾濱に赴けり。

### 三江省方正県伊漢通開拓団 農民避難経過調査

昭和21年5月16日

責任者 安田宗孝

8月25日、方正集結の命、方正県公署より来る。是より先8月16日、第一次の移動命令を受け、北進郷、青雲郷、富士見郷、臨江郷、本部郷の五個部落に待機しありたる団員全部を直ちに本部郷へ集結せしめ、本日午後3時、方正へ向け出発。斯くして第一回の移動を開始す。

総勢753名、本隊を伊漢通中隊とし、之を8ヶ小隊に区分、夫々小隊長男子1名、之に伝令を附す。中隊長水本道祖一、及び中隊附2名、始め車馬にて食糧其の他重要物資を運搬し、病人・幼児は乗せて行く計画ありしも、8月15日以来日本軍の開拓団馬匹使用の為、殆ど車馬なく、遂に最小限度の食糧及び多少の衣類を携へ、全部歩行軍せしむることに決す。

本日、行程5キロメートル、所要時間4時間。実に牛の歩みより尚遅々たる行軍振りなるも、之は途中匪賊に逢いたる為と、道路の荒廢甚だしき為なり。落伍者は見ざるも、途中重き背負荷物を捨てたる者、相当あり。此の夜及び26日の夜迄、方正県公署官舎に二泊す。此處にて尚若干の米、みそ、砂糖、梅干しの配給を受く。

8月27日、佳木斯方面、依蘭方面及び通河方面の引揚団と合併、総勢千二百名余。午前8時、元方正飛行場に集結、出発せんとする際、方正副県長初め5、60名の男子蘇聯兵に連行せしめられ、午後2時、結局総指揮官ら方正に残したる儘、残余部隊出発。長野開拓団に到着せしは午後9時過ぎ也。尚一部此の日到着せ完ぜざるの部隊は、途中鮮系部落付近に野宿せり。

8月28日、午前11時頃本隊到着を待ち、昨日当地に宿泊せる部隊、本日更に李花屯へ先行すべき命に従ひ、伊漢通中隊大部分及び佳木斯中隊800余名は直ちに出発す。尚此の日到着せる部隊は一日行軍を延期したる為、是より9月半迄半月の間此の地にて匪団の襲撃を受け、無一物になりたる者多し。此の日先発隊は無事李花屯に着く。途中1名の女が殺されたるを見たる外、本隊に被害なし。

8月29日、終日雨の中を行軍す。子は泣き、落伍者出ず。満人部落に一泊す。金品を盗まれたる者、若干。

8月30日、中和鎮着。治安状況頗る險惡。男子は銃を持ち、終日警備配置につく。

31日、一日休養することにする。15里の行程左程に疲れざるは、途中同胞の開拓地有りたるお蔭

にて、砂漠にオアシス見たる如き心持す。蜂蜜も豊富にあり、豚も殺し、鶏をしめて、少々勿体なき感あり。夕刻、本部より急使来る。明日元来る處へ引返すべき達示なり。一同大いに失望、又落胆の感じ禁ずるに能わず。遂途には匪団の蠢動するあり。遂に引返すに決す。

9月1日午後8時、嘉信村にて嚴重なる身体検査を受けたる後、宿舎に收容さる。老毛子（筆者注、ロシア人のこと）の監視中に初めて難民らしき不安なる一夜を明かす。然共、予期したる如き何事も危険なし。

9月2日、宝興村一泊。鮮系の好意により、白米を食す。

9月3日、方正着。路傍に野宿す。頗る寒さを憶ゆ。後日此の一夜の野宿のため、病に倒れ命を失ひし者少なしとせず。されど明日は伊漢通より船にて直接哈爾濱へ行けるとの老毛子の話に、一夜の苦勞を忘れて眠りたるも、後にて思えば是も例の老毛子の瞞着手段にて、之より半年余りの長きに渉る我等の餓死と凍死と、而して無限の忍苦生活始まりたる也。

伊漢通開拓団移動経過略記

| 隊 名    | 人員   | 出発<br>月日 | 到着<br>月日 | 経 路                                                                | 一人当<br>経費 | 入所<br>月日 | 備 考 |
|--------|------|----------|----------|--------------------------------------------------------------------|-----------|----------|-----|
| 第1次先発隊 | 23名  | 4.6      | 4.12     | 本部 — 嘉信 徒歩1泊<br>嘉信 — 珠河 大車3泊<br>珠河 — ハルピン 貨車1泊                     | 105円      | 4.12     | *   |
| 第2次先発隊 | 21名  | 4.8      | 4.12     | 本部 — 開発經由 大車1泊<br>朝鮮部落 — 延寿 大車1泊<br>延寿 — 珠河 大車1泊<br>珠河 — ハルピン 貨車1泊 | 190円      | 4.12     |     |
| 本 隊    | 149名 | 4.14     | 4.17     | 本部 — 嘉信 徒歩1泊<br>嘉信 — 延寿 大車1泊<br>延寿 — 珠河 大車1泊<br>珠河 — ハルピン 貨車1泊     | 121円      | 4.18     |     |

\* 備考欄には下記の記録があった。スペース不足のため、以下に記す。

「哈爾濱到着人員 193名、花園入所。その他 16名、有料収容所。現地残留者人員 161名（満妻を含む）」

伊漢通開拓団人口動態表

| 区 分     | 人 員 | 大 人 |     | 子 供 |     | 合 計 |     | 備 考       |
|---------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----------|
|         |     | 男   | 女   | 男   | 女   | 男   | 女   |           |
| 8.15 現在 | 779 | 91  | 247 | 224 | 217 | 315 | 464 | 現在残留 113名 |
| 帰 団 者   | 20  | 20  |     |     |     | 20  |     |           |
| 自 決 者   | ナシ  |     |     |     |     |     |     |           |
| 病 死 者   | 308 | 43  | 56  | 104 | 105 | 147 | 161 |           |
| 満 妻     | 68  |     | 68  |     |     |     | 68  |           |
| 其 の 他   | 99  | 1   | 5   | 46  | 47  | 47  | 52  |           |
| 現在人員    | 205 | 43  | 85  | 42  | 56  | 56  | 120 |           |
| 稼 働 者   |     |     |     |     |     |     |     |           |

#### 4 付記： 合田一道四部作等の参照

ノンフィクション作家・合田一道氏の四部作とは、出版順に『満州開拓団 27 万人 死の逃避行』（1978. 3）、『追跡・満州開拓団幻のノート』（1978. 12）『開拓団壊滅すー「北満農民救済記録」からー』（1991）、『検証・満州一九四五夏ー開拓団の終焉ー』（2000）である。

「方正地区」記録に関しては『逃避行』p. 209－211、『壊滅』p. 211－213 で取り扱っている。ただし、『逃避行』では部分的掲載である、『壊滅』も同じく部分的で、少し解説が加わっている。

「伊漢通」記録に関しては『逃避行』p. 188－189、『壊滅』p. 162－164、『検証』p. 143－151 で取り扱っている。ただし、『逃避行』では「経過報告書は全て省略」し、上に引用した表組み部分の紹介のみである。『壊滅』も一部分、『検証』には解説は詳しいが、記録全体はこの3著作を参照してもその全体を見ることはできない。

したがって、合田一道氏の四部作をすべて参照しても、「方正地区」及び「伊漢通」に関する北満農民救済記録の全体を見ることはできない。ここに紹介するのが、その全貌である。

なお、方正地区日本人公墓に関しては、方正友好交流の会編『風雪に耐えた「中国の日本人公墓」ーハルビン市方正県物語ー』（2003）および奥村正雄編著『天を恨み 地を呪いました』（2004）が詳しい。残留婦人だった松田ちゑさんの手記『開拓残留妻の証言』（1983）もある。伊漢通開拓団に関しては、沖縄女性史を考える会編『沖縄と「満洲」ー「満洲一般開拓団」の記録ー』（2013）がある。また、方正に集結した開拓団全体については、高橋健男『満州開拓民悲史ー碑が、土塊が、語りかけるー』（2008）が詳しい。

（たかはし・たけお：1946年、新潟県見附市生まれ。中学校の校長などを経て現在、満洲移民研究家、本会会員。著書に『満州開拓民悲史』（批評社）、『赤い夕陽の満洲にてー「昭和」への旅』（文芸社）『幻の松花部隊ー若き義勇隊員たちの満洲』などがある）

# 「虫の目」ではなく「鳥の目」で考察を！

—中国大陆からの引き揚げを巡って—

矢吹 晋

昨年は敗戦70年であり、さまざまの回顧行事が行われた。音質のよりクリアな玉音放送が発見され、いくどか放送されたが、そこでは音質にばかり注意が向けられ、その内容にはほとんど関心が向かなかった。この「終戦勅語」では、対米英敗戦の事実は語られているが、対中華民国との敗戦は、実にアイマイだ。敗れたのかどうか、人々の脳裏に疑問が残ったのは当然であった。実は、日本が開戦勅語<sup>1</sup>によって対米英の宣戦を行ったが、その論理がおかしいのだ。これを大東亜戦争<sup>2</sup>と名付けて、ついでに盧溝橋事変以来の「事変」を大東亜戦争と新たに名付けた戦争の一部として追認した。ところがこれは日本国内に対する定義にとどまった。

## 非論理的な日本政府の公式見解

開戦勅語の直後に中華民国は対日宣戦を布告したが、日本政府はこれを無視した。なぜか。当時の日本から見ると、重慶政権は「残存政権」にすぎない存在であり、いずれ消滅するとの見通しのもとにこれを無視したのだ。近衛声明が「蒋介石政権を相手にせず」<sup>3</sup>と断じたのは1938年のことだが、相手にしない政権に対して宣戦を布告することは不可能であり、「宣戦布告なき戦争」が戦われた。数年後に、この41年以来の大東亜戦争を定義した閣議決定では、事後にこの戦争に含めて、「事変」から「戦争」に格上げしたが、これはあくまでも国内的な呼称の変更にとどまり、対外的なものではなかった。その証拠に、1941年12月12日に中華民国政府（重慶政権）が対日戦争の宣戦布告を行った際には、これを無視している。中華民国から見ると、日中は戦争状態にあるが（それは日々の現実でもあった）、日本政府はこれを依然として「事変」扱いして「戦争」として認めなかった。つまり、日本は米英とは戦争をしたが、中華民国とは戦争をしていない——これが日本政府の公式見解なのだ。何たる非論理か。ここから確認できることだが、1937年以来の「宣戦布告なき戦争」は、中華民国に即して見ると、依然として「宣戦布告なき戦争」のままであった。この結果、何が起こったか。

「始まりのない戦争」を終わらせることはできない。日中戦争は、はじまりがなく、それゆえ論理的に「終りのない戦争」として、行方不明になった。戦争という「現実」は、誰の目にも明らかでありながら、中国戦線に関するかぎり、「事変はあるが戦争はない」、それゆえ「勝ち負けの結果もアイマイ」になった。これは実に奇怪な理屈だが、これこそが「開戦勅語」と「終戦勅語」（玉音放送）の「論理」なのだ。<sup>4</sup>

今年は敗戦に伴い、大陸を追われた引き揚げ体験70周年である。私自身はこの体験を持たないが、昭和が二桁になってまもなく生まれた、同世代の仲間には「危うく残留孤児の運命であった」と感慨深げに、述懐する友が少なくない。旧臘訃報が届いた旧友の体験

記を想起しつつ、ネットサーフィンをしたところ、たまたま次の2つの文が目にとまった。

(a)「GHQのダグラス・マッカーサー総司令官は人道的立場から引き揚げを早期に終了させるつもりであり、GHQ指令で厚生省が引揚援護庁を設置し、行政事務を行った」

(b)「ソ連軍占領下地域の満州・朝鮮北部などと比較するとスムーズであり、1946年には9割以上達成された」。

敗戦時に海外に残された在留邦人は、事後のある資料によれば、次の表のごとくであった。戦区ごとに連合国が送還事業を担当した。都合600余万人のうち、中国軍管区は312万人、ソ連軍管区は161万人と推定されている。前者は引き揚げ総数の5割弱、後者は総数の4分の1を占め、両方で7割を越える。引き揚げの苦労話の圧倒的部分がこのケースになるのは、当然であろう。

表 連合国5大軍管区ごとの日本人送還者数

|               |                                                   |                       |
|---------------|---------------------------------------------------|-----------------------|
| 1.中国軍管区       | 推定 312 万人                                         | 47%                   |
| 2.ソ連軍管区       | 推定 161 万人                                         | 24%                   |
| 3.イギリスオランダ軍管区 | 推定 74 万人                                          | 11%                   |
| 4.オーストラリア軍管区  | 推定 14 万人                                          | 2%                    |
| 5.アメリカ軍管区     | 推定 99 万人                                          | 15%                   |
| 計             | 推定 660 万人(1949 年までの帰国実績 624 万人、1976 年まで実績 629 万人) | 推定計 660 万人を 100 とした比率 |

資料、河原功編『台湾引揚・留用記録 台湾協会所蔵』全10巻 監修・編 ゆまに書房 1997～98

前述のように日本はポツダム宣言を受け入れて無条件降伏したが、ポツダム宣言に署名したのは、米英中の3カ国であり、ソ連は参戦後に加わり、漁夫の利を漁った。宣言は「連合国諸国を代表として」発表したものであり、戦勝者はむろんこれら3カ国に止まらない。イギリスの背後にはオランダやオーストラリアのようなイギリスに近い諸国も連合国の一員としてポツダム宣言を日本に押し付ける側にいた。上の表が端的に示すように、日本帝国は戦線をアジア大陸の戦区と太平洋戦区とに拡大したまま、二つの原爆を契機として「終戦」を決断した経緯があるので、敗戦国日本の降伏（武器引き渡し）式は、それぞれの戦区ごとに行われた。

代表的なものが1945年9月2日、東京湾に浮かぶ戦艦ミズーリ号で、マッカーサー元帥と重光葵外相とによる降伏式であったことはいままでもない。中国大陆では9月9日に岡村寧次支那派遣軍総司令官は、南京中央軍官学校講堂で、蒋介石総統代理の何応欽一級上將に対し、投降文書に調印した。中国共産党は戦勝70周年前夜の2014年になって、「9月3日」を抗戦勝利記念日に決定し、2015年9月3日に天安門広場前で軍事パレードが行われたことは、昨年大きく報道された通りである。

### 「人道的立場から」の引き揚げか？

さて、冒頭に私は二つの文を挙げた。(a)には、マッカーサー元帥が「人道的立場から」引き揚げを行った旨が記されているが、これはほんとうだろうか。トルーマン大統領

の声明（1945年12月15日付）を読んで見よう。この声明のタイトルは、「米国の対中国政策」Statement by the President: United States Policy Toward China. December 15, 1945.）となっている。

トルーマンはこの短い声明で日本軍国主義を打倒したあとの中国とアメリカがどのような関係を取り結ぶことになるのか、その根本方針を明らかにしたものだ。その方針とは、「日本軍の影響力排除」の一語に尽きる。このキーワードをトルーマンは三回よびかけている。すなわち①「中国に日本の影響力が残る可能性を排除するために、米国は日本軍を武装解除し大陸から撤退させることを明確な義務と考える」(to remove possibility of Japanese influence remaining in China, the United States has assumed a definite obligation in the disarmament and evacuation of the Japanese troops)。②「国際的事務において、とりわけ日本軍の影響力を大陸から排除するために、アメリカは中華民国政府と協力してきたし、今後もそれを続ける考えだ」(The United States recognizes and will continue to recognize the National Government of China and cooperate with it in international affairs and specifically in eliminating Japanese influence from China)。③「もし中国から日本軍の影響力を排除し、統一された、民主的かつ平和的な国家としなければ、太平洋における平和の維持は危機にさらされよう」(The maintenance of peace in the Pacific may be jeopardized, if not frustrated, unless Japanese influence in China is wholly removed and unless China takes her place as a unified, democratic and peaceful nation.)

このトルーマン声明から分かるように、日本が投降した8月15日から4カ月後の時点でトルーマンは、中国大陸に残留する軍国主義分子がそこを拠点として、日本軍国主義を復活させ、ふたたびアメリカに挑戦するような事態は絶対に阻止しなければならないと考えていた。沖縄島への上陸作戦で海兵隊2万を失ったことは、米軍にとって大きな衝撃であった。このような抵抗がもし日本本土で行われるとしたら、米軍の犠牲者は相当に大きなものとなることを危惧していたわけだ。沖縄戦以後、日本本土へのアメリカ占領軍の上陸はあっけないほど簡単に終わったことからして、ルーズベルト声明は、日本軍国主義への過大評価のようにも思われる。しかしながら、原爆の威力が発揮される前の敵情認識として、トルーマン声明に見られるように、日本軍国主義の底力を決して軽視することはなかった。その一つが日本軍国主義の復活への危惧であった。山西省において、後日旧日本軍の残留問題が生じたことからして、トルーマンの杞憂は決して根拠のないものではなかった。<sup>5</sup>

トルーマン声明を読むことで明らかになるのは、アメリカはまず日本軍を一兵たりとも大陸に残さない方針を貫徹し、次いで民間人も日本に送還する方針を考えた。つまり、アメリカが日本軍と民間人の引き揚げに積極的であったのは、「人道的立場」に基づくものではなく、「日本軍国主義の復活を防ぐため」にほかならない。もし「人道主義」ならば、まず民間人を送還し、軍人はそのあとに送還したはずだ。実際にはまず武装解除して将兵を日本に送還することを第一の作業とした次第である。

大陸からの日本人総引き揚げを決定した戦勝国アメリカの大方針は以上のごとくであるにもかかわらず、「引き揚げはアメリカの人道主義によって速やかに行われた」とするごとき、事実誤認が広く横行したのはなぜか。このような「好ましいアメリカ像」「民主主義社

会の手本」としてのアメリカイメージの真逆のイメージをソ連管制下の地域から引き上げた人々が抱いたからではないか。

満洲引き揚げの惨憺たる苦労話、この世の生き地獄物語は、大量の体験談を通じて、かなり広く知られていると見てよい。非武装の避難民に対して、腕時計や金目のある物品を奪い、女性に対しては性的暴行を繰り返したソ連軍の非道を非難する声は巷に溢れた。このようなケダモノのようなソ連軍のあり方と対比して、米軍が葫蘆島に向けて、LSTやリバティ船を差し向けた配慮は、著しい対照をなすものだ。そこから米軍＝人道主義＝善のお手本、ソ連軍＝非人道主義＝悪のかたまり、というイメージが生まれたのは、無理からぬところもある。

しかしながら、戦後70周年を経たいま、自らの小さな体験だけ、あるいは自らに都合の良い事実だけをふくらまして、善悪、敵味方を認識するような「虫の目」史観を克服しなければ、複雑に変化する国際情勢のもとで、軽武装国日本の安全保障はあやういのではないか。

ちなみに安倍内閣は昨年旧敵をあたかも親戚のごとく手厚く扱った。沖縄の返還後も基地使用者として居残りを続ける米軍の対日政策を指揮してきたアーミテージ元国防次官補に叙勲して、日米軍事同盟の結束強化を謳いあげた。他人の勲章なぞどうでもよいが、それが沖縄基地の現実の反映だから、取り上げないわけにはいかない。沖縄返還以後40余年を経ても、基地返還の見通しが立たない政治の現実を改めて再考する必要がある。他方、沖縄返還を小道具に使った、「とりかえばや」物語の図さながらに、齒舞・色丹諸島はソ連が解体し新生ロシアに変わっても、返還されるに至らない。

このような現実を見て、いま改めて思うのは、戦後はまだ終わらない、という実感である。なるほど、時間はすぎて引き揚げ体験をもつ世代は、日に日に鬼籍に向かう。この状況にあって、鬼畜のようなソ連軍 vs. 人道主義のアメリカといった善悪二元論を克服するにはどうしたらよいか。

### 「鳥の目」で世界を眺めたい！

引き揚げ者たちのイメージは、テレビに映し出されるシリア難民の姿に重なる。着のみ着のままで幼児を連れて地中海を小さなボートで渡る人々の姿は気の毒で直視しにくい。ただし、現代のシリア難民と満洲引き揚げ者を比べると、大きな違いが一つあることに気づく。彼らはスマホによって、どこまで逃げればよいか、どこまでたどりつけば、ボランティア市民が待ち受けているかを十分に知ったうえで行動している、とテレビは伝える。この「情報」が満洲引き揚げの場合には、決定的に不足していた。そこで間違った情報に振り回されて徒労を重ね、犠牲を増やした側面を否定できない。

身近に見るソ連軍の暴行にせよ、必死の思いでようやく乗船できたリバティ船にせよ、個々の情報は当時の人々にとって、固い事実、いささかも間違いのない正しい事実だ。しかしながら、これらの身近の情報から、米軍は「人道主義の立場」から日本人の送還を速やかに行ったのだと即断することは大きな過ちにつながる。そのような人道主義がもし米軍の立場であるならば、なぜその人道主義の精神は沖縄の軍事基地の返還において発揮されないのか、という疑問につながる。かつて鳩山首相が日ソ交渉をまとめあげて、齒舞、色丹諸島の返還に取り組もうとしたとき、当時のダレス国務長官は、日ソがそのような「取

引」をやるならば、「沖縄返還は永遠に不可能になる」と恫喝した<sup>6</sup>。

70年を経て、敗戦の体験も、引き揚げの体験もしだいに薄れて、体験者が「虫の目」で見たものが絶対化されかねない風潮がある。中国大陆からの日本人の送還を決定したのは、アメリカの人道主義精神に基づくものといった解釈は、その典型である。

では「虫の目」で見た視野の狭い体験をどのように扱うのか。「鳥の目」で見たより広い知識で補強し、修正することが必要だ。「井のなかの蛙」とか、「葦のズイから天井覗く」とか、古来狭い体験を揶揄する諺は誰でも知っている。しかしながら、人々は往々、この狭い体験に縛られている。

引き揚げ者数が600万人を超えたことについて有史以来の大民族移動、古来稀に見る悲惨な行列を語るのはよい。だが、広く世界に目を向けると、第二次大戦後の引き揚げ者は、ドイツでは1000万人を超えて日本を上回る。こういうドイツは陸路の送還であり、日本は海路だからより困難だというコメントがすぐ想起される。なるほど、陸と海は違う。だが、船に乗れば、海賊の襲撃はなくなるのに対して、陸路は繰り返し強盗の類に襲われたことを現代ドイツ史は語る。特に悲劇なのは、ナチスの版図拡大以後に強制的に「新ドイツ人」にさせられた人々の運命だ。日本では「朝鮮人・台湾人」が一時は「帝国臣民」となったものの、敗戦後は日本人ではなくなり、被曝補償を受けられないケースがある（英文の資料では、彼らを **NEW SUBJECT** に分類する）。ドイツでは、ナチス時代に強制的にドイツ国籍にさせられたために、戦後は住み慣れた故郷を追われた人々もいた。日独は相違点も多いが、酷似している点も多い。国際比較の視点を得て、「鳥の目」を補強することは大いに役立つ。

最後に戦後の日独の最大の違いを一つ挙げたい。ソ連邦が解体した契機をとらえて、東西ドイツは、見事に統一を実現して、戦後体制から脱却した。日本はソ連邦解体という千載一遇の好機を空しく逸したばかりでなく、安倍内閣に至っては、いよいよ対米従属を深めている。戦後体制からの脱却をスローガンに掲げながら、従属を深める結果になるという政治は、グロテスクとしかいいようがない。サンフランシスコ条約が残した領土問題を一つとして解決できず、北朝鮮との戦後処理も終わらない現実とドイツ統合の成果を対比すると、戦後処理において、ドイツの成功と日本の失敗は鮮やかな対照を示す。戦後日本は、万事アメリカ頼み、「鳥の目」で世界を眺めることを忘れてきた。ドイツは臥薪嘗胆、ドイツを復興させて、いま世界から尊敬されている。この教訓を学ぶべきではないか。

---

<sup>1</sup> 1941年12月8日付の「米英両国ニ対スル宣戦ノ詔」は、開戦に至った事情を次のように説明している。「朕茲ニ米國及英國ニ対シテ戦ヲ宣ス」、この一句から分かるように宣戦を布告した相手は「米國及英國」である。では、なぜ米英なのか。日中戦争が勃発した直接のきっかけである盧溝橋事件（一九三七年七月七日）で衝突したのは中華民国の軍隊ではなかったのか。開戦の詔勅に曰く、中華民国は日本帝国の真意を解せず、東亜の平和を攪乱し、日本帝国をして武器を執らしめ、4年余を経た（「中華民国政府、曩ニ帝國ノ真意ヲ解セス、濫ニ事ヲ構ヘテ東亞ノ平和ヲ攪乱シ、遂ニ帝國ヲシテ干戈ヲ執ルニ至ラシメ、茲ニ4年有餘ヲ経タリ」）。これが詔勅の対中認識である。「中華民国が東亜の平和を攪乱した」ので「日本帝国は武器を執ることを余儀なくされた」と認識している。これは、「4年有餘ヲ経タリ」とあることから、1937年7月7日から1941年12月8日までの4年5カ月、すなわち盧溝橋事件以来、12月8日までの日中戦争を指すことは明らかなだ。

<sup>2</sup> 1941年12月12日、「今次戦争ノ呼称並ニ平戦時ノ分界時期等ニ付テ」という閣議決定が行われた。その内容は、以下の通りである。一、今次ノ対米英戦争及今後情勢ノ推移ニ伴ヒ生起スルコトアルヘキ戦争

ハ、支那事変ヲモ含メ大東亜戦争ト呼称ス。ここからあきらかなように、「支那事変ヲモ含メ、大東亜戦争ト呼称ス」と決定した。すなわち 1941 年 12 月の対米英宣戦の布告後に戦われる戦争は、「大東亜戦争」と命名され、これには「支那事変」(1937～)をも含むことが確認された。この決定によって、1937 年以來の支那事変すなわち日中戦争(継続中)と 1941 年以來の(今後展開される)対米英戦争は、「大東亜戦争」の名で括られた。太平洋戦区の闘いを「東亜」と呼ぶ矛盾。ここで「東亜」が東アジア地域 **East Asia** を指すことに誤解の余地はない。ただし、これに「大」が付されたことについては、①「大東亜共栄圏」を目的とした戦争を指すと解する「イデオロギー的解釈」と、②単にマレー半島やタイ、ビルマ辺りまでを含む「広義の東アジア **Greater East Asia**」、すなわちという地理的境界を意味するにすぎぬと解するもの、③そして両者を重ねた含意で用いるものなど、さまざまな解釈が行われた。含意、解釈を統一する閣議決定は行われていない。

<sup>3</sup>昭和 13 (1938) 年 1 月 16 日、近衛文麿首相は、「帝国政府は爾後国民政府を相手にせず、帝国と真に提携するに足る新興支那政権の成立発展を期待し、これと両国国交を調整して再生支那の建設に協力せんとす」という声明を發出した。つまり、重慶にあった蒋介石政府とは断交し、国民政府が支配しない地域にできつつあった汪兆銘政権を相手にするということである。何とかして「事変を收拾したい」ために、抗日姿勢を堅持する蒋介石政権(当時、重慶に遷都)に替えて、「真に提携するに足る新興支那政権＝汪兆銘政権」の発展を期待した。

<sup>4</sup> 安倍内閣の終戦談話にもし意味があるとすれば、この矛盾を分かりやすく説明することであったが、遺憾ながらそれは実現せず、開戦と終戦・敗戦の矛盾をますます混乱させるようなツギハギの談話に墮した。

<sup>5</sup> 中国共産党の中原野戦軍と対峙していた閻錫山が内戦の本格化を見越し、日本軍の大規模残留を要望した。これに城野宏や河本大作ら現地関係者が同調し、結果、当時 3 万人いた民間人のうち約 1 万人が残留に応じた。これに日本軍の一部(当時山西省を担当していた澄田中将麾下の支那派遣軍第一軍将兵 59000 人)が同調し、結局在留邦人および日本兵を合計した約 2600 人が戦闘員(特務団)として閻錫山の軍隊に編入され、終戦後 4 年間の内戦を戦った。うち約 1600 名は日本へ帰還できたが、残り約 1000 人のうち約 550 名が戦死、残りは人民解放軍により長きにわたる俘虜生活を強いられた。日本政府は残留兵を「志願兵」とみなして「現地除隊扱い」とし、恩給を補償しなかった。2006 年公開のドキュメンタリー映画『蟻の兵隊』(池谷薫監督)において、元残留兵の奥村和一が、山西省档案馆(公文書館)において残留軍の総隊長訓と総隊部服務規定を発見した。この資料から当時、中華民国・閻錫山の要請を受けた澄田中将が、部下を中国大陆に残す際に残留部隊に対し、虚偽の駐留目的を伝えていた可能性が指摘されている。

<sup>6</sup>原貴美恵『サンフランシスコ平和条約の盲点』、272～273 頁によると、1956 年 8 月、ダレスは日本に対して、もしソ連に北方領土問題で譲歩するなら、沖縄の潜在主権も保証できないと脅しをかけた。

(やぶき・すすむ：1938 年、福島県生まれ。アジア経済研究所などを経て現在、横浜市立大学名誉教授。専攻は中国経済論、現代中国論。『文化大革命』『毛沢東と周恩来』『鄧小平』(講談社現代新書)、『朝河貫一とその時代』『尖閣問題の核心』(花伝社)など著書多数)

# 満鉄会の解散について

天野 博之

## 解散のニュース

平成28年（2016）3月をもって、70年の歴史を持つ満鉄会は解散しました。

満鉄会解散が複数の新聞に最初に報じられたのは、27年12月半ばのことです。この日から連日事務局には、おびただしい電話、メール、訪問客がくるようになりました。父祖のルーツを知るため、あるいは自分史を書くため、という理由です。

3月半ばを過ぎると、改めて各紙が解散を報じたため、問い合わせはさらに増えました。多い時は数組の来客が順番を待つ状況となりました。

最近では子供世代以上に孫世代の問い合わせが増えています。しかし私自身を考えても、祖父の情報はあまり持ってはいません。NHKの隠れた人気番組『ファミリーヒストリー』でも、ゲストが初めて知る祖父母の情報に涙する姿をよく見ます。

お祖父さんが大連に住んでいた、父が奉天で生まれた、という程度の情報で、お祖父さんの職場や仕事を調べてほしいという要望も多く来しました。満鉄は単なる鉄道会社ではありません。満洲国が成立するまでは市役所のような地方行政の役割を担っていたので、職種は多様です。昭和19年9月の統計では、満鉄で働く日本人社員は約14万人、創業以来を通算すると30万人以上になるでしょう。毎年のように作成されていた「職員・社員名簿」からその名を拾い出す作業ですから、何年ごろ、どこの地域にいた、事務系か現場系か、最終学歴くらい判らないと探すのは非常に困難です。

問い合わせの中には、お祖父ちゃんは〇〇駅の助役だったというのが小荷物係だったり、××ヤマトホテルの総支配人だったはずの人が厨房の配膳手だったり、夢を壊すことも多く、事実をどのように伝えるか悩みました。どうやら満洲に渡った人には大口をたたき傾向があったようです。

## 満鉄会に残る貴重な社員名簿

ところで、満鉄会には昭和20年8月15日現在満鉄に在籍した社員の名簿があります。名簿には一人ひとり、本給、入社年月、退職金相当額、社内貯金額などが細かく記された貴重な社員台帳です。敗戦直後の昭和20年秋、奉天鉄道局の人事課が総力を挙げて作成したものです。

引揚げの際、書類の持ち帰りは厳禁されていたので、信頼できる中国人社員に預けて帰国しました。この社員台帳が、思いがけず中国側から外務省を通じて返還されてきたのは、昭和25年6月のことです。憶測を許されるならば、前年10月1日、中華人民共和国建国を宣言した中国政府が、当時国交がなかった日本に示した何らかのサインだった可能性が考えられます。当時は周恩来首相のような日本をよく知る政治家が政府内にいました。同じ6月下旬、朝鮮戦争がはじまり、この機運は一挙に消滅したのではないのでしょうか。

返還された名簿は、すべてを個人別カードに書き写しました。そのデータが20年代末から始まった退職慰労金の支払いや公務員になった社員の年金期間の加算に利用され、今は子や孫世代のルーツ探しに役立っています。

現在11冊にまとめられた大判の社員台帳と社員カードは、国会図書館憲政資料室に移管することが決まっています。

## 満鉄会の歴史

満鉄会は、満洲からの第一年度の引揚げが終わった昭和21年12月、六百名の社員が集まって結成した満鉄社友新生会が始まりです。その後、財団法人満鉄会、任意団体の満鉄会、そして3年前には満鉄会情報センターと名前を変え、3年間と限定して運営を続けることを理事会で決定しました。

会員数も千名を割って高齢化も進み、会員からの会費と寄附金だけで運営してきた会の財政基盤も危うくなってきました。そこで満鉄会大会の開催などは中止し、会員結集の中心である留魂碑の護持や満鉄会報の発行などによる、会員の親睦活動に特化してきました。

昭和20年代30年代は、社員の生活再建、退職慰労金の支給を政府に働きかけ、40年代には半官半民の国策会社だった満鉄社員の勤務期間を、厚生年金の期間に算入するよう、政府や国会に請願しましたが、この運動は帰国後公務員になった社員だけに適用されることで終結しました。この時期には、自民党から共産党まで十数人の国会議員を輩出し、運動に役買いました。

その後は、アメリカに持ち去られた満鉄資料返還運動を国会図書館と共同して行い、原資料の返還はなかったものの、一部はマイクロフィルムとして国会図書館で閲覧できるようになりました。

昭和50年代に入ると、満鉄と満鉄人の想いを託すモニュメントを造ろうという提案が多数の賛同を得て、57年4月、富士山麓御殿場の富士霊園の一角に、満鉄留魂碑を建立しました。約8千人、155団体から9千万円に上る寄附金が寄せられ、年に一度、桜の季節に留魂祭を行ってきました。

## 今後の「満鉄会」活動

満鉄会の3千点を超える貴重な蔵書は、国会図書館、アジア経済研究所図書館、昭和館、東洋文庫などに寄贈します。

また会員には満鉄会継続への要望が強いので、満鉄会ホームページを一新し、関係情報の発信や、会員相互の連絡の場とする一方、満鉄や満鉄会に対するお問い合わせには、当分の間、私が自宅事務所から対応する予定です。

(あまの・ひろゆき：1935年、大連で生まれる。撫順市、吉林市の在満国民学校で学び、47年7月帰国。小学館で歴史分野の書籍編集に従事。04年から財団法人満鉄会理事、前満鉄会情報センター専務理事兼事務局長。著書に『満鉄を知るための十二章』などがある)

# 「満州」に渡った私たち

## —繰り返してはならない怨念の連鎖—

名取 敬和

### 父の真実の声は聞けず

私は昭和3（1928）年、長野県諏訪郡富士見村（富士見町）に農家の2男として生まれた。当時、富士見村も経済更生村に指定され、村の優秀な青年が「開拓の父」と言われた加藤完治の教育を受け、3人組が連日役所に押しかけ、村の更生は満州分村以外にない、と口角泡を飛ばし村長に迫る。

村長、樋口隆次氏は犬養総理や小川平二代議士とも交流があり、満州開拓移民には反対であったようだが、村長という立場上、村の更生の責任を感じ、押し切られ、村議を重ね、立派な宣言文をつくり、村の三分の一を移住させ、自ら団長となって指揮をとる、と村民の協力を求めた。

村長の熱意により、中農以上の人が多く移住し、因って、現地に行っても優秀な成績を上げ表彰も受けている。しかし戦況悪化により、召集が多くなり、その結果、各部落に割り当てまでした。私の部落は小さく、父は区長や消防の役職など度々やり、また団長と同級生でもあり、責任上行かざるを得なかったのか、あるいは純粋な人柄ゆえか、国策に洗脳されたのか、満州に渡った。

しかし、昭和21（1946）年、引き揚げの途中、病魔におそわれ、異国の土と化し、真実は何一つ聞いていない。

### 「満州には行くな」と兄は反対した

私たちの入植地は木蘭県王家屯、ハルピンより松花江を下り、160 km位のところで荒野が多く、開墾には人、馬とも大変であった。我々も子どもながらに手伝った。当時、父は47歳、人生50年と言われた時代、親戚は大反対、また兄は、当時としては勉強家で色々な本を読み、広い知識を持っており、満州には絶対行つては駄目だと反対していたが、昭和16（1941）年2月召集され、その声は途絶えた。昭和16（1941）年5月家族全員で移住した。働き者の父に家族の協力が成果を上げていた。しかし昭和20（1945）年、敗戦により全てを捨て、僅かな身の回り品を持って堅固に出来ている学校や病院に集結避難した。

本来、開拓民は純粋な人柄であり、現地人とは融和を図っていたし、個人的には恨まれるような人は少ない。日本政府や行政が現地人の耕地や家を、地域を指定し安く買い上げ、現地人を奥地に追いやり、開拓民に配分し、余った土地を現地人に小作に出したり、現地人を労働者として使っていた。

同じ移民でもブラジルやハワイなどは、現地人の下働きをし努力の末、独立したと聞い

ている。「満州」は逆だ。反感によって反撃されるのは仕方がなかった。

敗戦後、「開拓民は土着も可」という指示。しかし、せめて中国政府と交渉し、生命の保証を取りつけてからならまだ分かる。国策として進めておきながらの棄民政策であった。因って、残留孤児や中国人妻に多くの死亡者が出た。

当時の日本の状況を察するに理解できない訳ではないが、身勝手過ぎだ。また個人資産も全て現地に放棄してきた。それは賠償の代償になったと聞いたことがある。帰国後、僅かな給付金はあった。国内に居た方も戦災に遭っている。当時の国状から皆、我慢している。

缶詰の空缶、鉄兜が鍋代わり、ボロボロの衣類、敗戦後、洗濯など一度もしていない。入浴など 430 日したことがない。乞食以下だ。でも何も思わない。

帰国して住む所は、富士見村で用意してくれてあった。食料の配給など米は僅かサツマイモに砂糖だ。砂糖は腹の足しにならない。農家に行って代えてもらえればまだいい。人間、窮極になれば強い。急な斜面を鋤で耕し、薯や麦、山菜などで命を繋いだ。必死になって自立。やがて日本の復興にも大きく貢献している。

しかし政府も満州に関心がない。残念です。

## 八路軍が暴徒を追い払う

さて我が団が敗戦後、被害が少なかった事を特記したい。

その第一は、入植地の場所は満州の中心部で山奥のため、ソ連軍の攻撃は無かったが、慰安婦の要求があり、その時団長は「我々は百姓であり、貴官方を慰安できるような者は一人も居ない。

万一、貴官方が我が国の婦女を冒すとあらば、先ず第一に俺の命を差し出す。しかし、その後男女一丸となって抵抗し、この地の屍を晒すであろう」と団長、身を賭して断言すると「ならば毛布を出せ」と、差し出すと持ち帰り、難をのがれた。団長は西郷隆盛のような度胸のある人であった。

第二は、中国国内に内戦があり、八路軍が優勢、敗北した国民政府軍の残党が銃を持ち、暴徒に合流し、病院に押し寄せてきた。窓に向かって銃を乱射、院内に突入し物資を略奪しようと殺気立っている。その時突入されたら最後と、残っていた少年が白鉢巻 10 数名が決死隊をつくり、敵中に突入、射手に竹槍で襲いかかり銃を奪い取り反撃し、飛散させ難を逃れた。その間、数名の死傷者が出た。この行動がなければ病院は全滅になったと思う。

第三は、連日の匪賊の襲撃に団長は、日本人の名誉のもと最後まで抵抗し、諏訪神社の分社に俺が火をつけて自決する。皆もその後に続いてくれとなっていた。皆、覚悟していた。最後と思える緊急警備会議が開かれた。その時一人の幹部が「今県政を掌握している八路軍（共産党軍）に救援を求めてみたらどうか」との提案に、団長は「それは無理だ。

八路軍は敵軍だぞ」と言う。しかし再三再四の提言に、団長は「ならばお前に任せる。俺は行けないから倅を連れてってくれ」と通訳を含め三人が決死隊をつくり、満州の1月24日、極寒マイナス30度、夕闇せまる時刻、家族や側近者と水杯を交わし、馬櫓に乗って出発、みんな三名の安否を気づかい合掌、無言で見送り、20kの夜道を運良く道中襲われることもなく到着し懇願、「よしわかった。明日救援に行く」となり、翌日50騎の騎馬隊が駆けつけ、前日の報復と更なる暴徒が病院を包囲、機を狙っていた。そこに駆けつけた八路軍が馬上より乱射、クモを散らすがごとし、暴徒を飛散してくれた。

以上三つの決死の行動が全員自決を免れ、因って我が団では一人の婦女暴行の犠牲者も自決者もなく、美談とし後世に語り継ぎたい。

### 後方支援を担った「満州開拓民」

思うに、昭和初期は世界的に大不況だった。日本はその打開策として大陸進出を企てた。日露戦争で勝ち得た遼東半島と南満州鉄道の権益を守るため、多くの軍隊と鉄道職員、行政関係者、技術者を多く送り込み、その方々の食糧確保の為、27万人にも及ぶ農民を半強制的に送り込み、また広い地域故に、関東軍のみでは守りきれないと、農家に一丁ずつ小銃を渡し、治安維持、今ように言う後方支援的な役割を担わせていた。

本来「開拓民」は、食糧の増産供給に治安維持的な役割があるので、兵役は免除すると言われていたが、昭和18(1943)年ごろより戦況が悪化してくると、19歳～45歳の男子を根こそぎ召集した。

残された老人、女、子どもは銃後を守り、勝つまではと、東を拝し、天皇万歳と三唱し、一生懸命頑張っていた。しかし、「吹く」と言われていた神風も吹かなかった。

敗戦により世情は逆転し、連日暴徒の襲撃に堅固に出来ていた学校や病院に集結、避難した。しかし身を守るも武装解除され、正しく、無鉄砲、竹槍で防戦するも連日、千人以上が物資の略奪に来る。時には命も奪われた。

### 繰り返してはならない怨念の連鎖

中国は過去の怨念と愛国心教育によって強力な国家となり、南支那海の進出など近隣の脅威になっている。また、北朝鮮は水爆開発に力を入れている。自衛のためだと言う。日本とアメリカは抑止力と軍拡競争である。皆が考えを変えれば無駄づかいである。国民を苦しめ、為などにならない。日本の戦中のようなものだ。結果、悲劇の元になった。その体験から得た知恵は、過去の侵略に対し陳謝し、お許しをいただき、近隣諸国に皆さまに優しく愛情をもって根気よく接することである。怨念は怨念の繰り返しになり、下手をすると地球の破滅につながる。お互いに英知をもって恒久平和のために、共存共栄のために頑張りたいと思っています。

## 無一文からの出発

私は昭和 21（1946）年 10 月引き揚げてきた。その後、紹介があり、熱海の酒屋に丁稚奉公に入り、当時酒販は免許制で厳しい基準があり、年季奉公してもなかなか支店など出してもらえない。まして学歴も無ければ金もコネもない。何とか独立しようと思い、全く未知の神奈川県小田原の鴨宮<sup>かものみや</sup>に、当時新幹線発祥の地ということで開けると言われていた。

その郊外の周りは未だ田園である。そこに 4 坪（130 m<sup>2</sup>）ほどの貸店舗があり、食品雑貨店を弟と始め、売り上げ増を図るため酒類の小売免許を税務署に申請した。しかし我々には何ら条件に合うものがない。二度目に司法書士にお願いするも嘘は書けない。三度目は自分でやったが当然、呼び出しがあり不許可を通告された。

その時、私は、「この道で国家に奉仕したいんだ」と言うと、担当官が「よしわかった。許可する」とほとんど条件に合うものなど無い異例で、今考えて、よくあの言葉が出たと思う。人生の岐路、正しく＜拓魂＞であった。

無一文からの出発である。既存店よりはるかに業績を上げ、メーカーや業界から何度も表彰されている。私も 80 過ぎて総て弟に譲り、趣味を生かしてボランティア活動、過去の体験から平和の大切さを伝える責任が私にはあると心に銘じています。

（なとり・よしかず：1928 年生まれ、1941（昭和 16）年、13 歳の時、家族とともに旧満州に渡る。戦後の 1946（昭和 21）年、日本に引揚げる。現在、神奈川県小田原に在住）

# 祖国に帰らぬ残留婦人たち

—その孤独な心を撮る—

千島寛 写真展



小田今朝江さん 1999年7月



林薫さん 1999年7月  
1945～46年の5か月間に2人の子供を亡くした。当時、ソ連兵が怖くて埋葬などできず、夜に紛れて遺棄せざるをえなかった。その場所と思われる所へお詣りに来て

千島 寛



写真展ポスター



本間武子さん、同居の3女家族と



浦崎蓮さん、寝たきりで 2010年7月

「中国残留婦人—さよなら日本、再見中国」を昨年12月11日から17日まで、東京・銀座5丁目の『フレームマン・ギンザ・サロンギャラリーⅡ』と、そのミニギャラリーで開催しました。1945年の敗戦後、それぞれの理由で祖国に帰国できなかった林薫（黒竜江省チチハル市）、本間武子（遼寧省瀋陽市）、浦崎蓮（内蒙古自治区扎蘭屯市）、小田今朝江（内蒙古自治区阿榮旗）の中国残留婦人の、4人の異国での日常生活を1995年から2015年まで、20年間、中国と日本で撮影したものです。

初めて出会った時はまだ中学生だった残留婦人の孫娘が結婚したり、バイクに乗っていた娘婿が、次に行った時には乗用車に乗り換えていた、という時間の経過と中国社会の変化と家族の成長も見ながら、それぞれの残留婦人の異国での老いにも寄り添ってきました。その姿を私は非情に撮りつづけました。そして最後の時を迎える時がきていました。撮りためてきた映像をまとめる時がきたことを私は感じました。その準備を始めた時でした。日中間に尖閣列島をめぐるトラブルが起きたのは。

2014年6月8日、私は方正友好交流の会の総会後に行われた藤野文晤さんの講演『日中関係と未来を考える』を聞き感銘しました。そして講演後の懇談会で私の迷いを藤野さんに話すと、藤野さんは言下に答えました。

「千島君ねえ、日中関係がベストになるのを待っていたら、いつになってもできないよ」  
この言葉で私の迷いは消えました。

（ちしま・ひろし：1956年生まれ。フリーカメラマン。青森県出身、現在、横浜市在住、一女の父）

# 再び戦争をしないために戦争法（安保法制）廃止を！

—「満蒙開拓団」の経験を踏まえて改めて今思う—

石橋 辰巳

『星火方正』には多くの方々の満蒙開拓団悲慘な逃避行が述べられ、私も 2014 年 5 月発行の 18 号に「満蒙開拓団・私が歩んだ道」を掲載させてもらいました。2014 年 3 月「方正友好交流の会」の企画による「満蒙開拓平和記念館」を訪ねる長野県下伊那の旅に参加して、記念館の資料を見学し、寺沢秀文専務理事のお話、語り部の故・中島多鶴さんのお話を聞いて、方正で開拓団の人々から聞いた話を思い出しました。

方正の収容所だけで死亡した「日本人公墓」には、約 5000 人が眠っています。開拓団の人々は、集団自決、命からがら逃避行を余儀なくされ、方正に到着するまでに、河を渡る中で力尽きて流され、幼い子供を流し、歩けなくなり置いてきぼりになったり、ソ連兵や中国人の匪賊に襲われ、物だけでなく命を奪われ、多くの犠牲者が出ました。

開拓団の 18 歳以上の男性は関東軍に召集され、ソ連軍に連行され、奴隷のように働かされ多くの人たちが犠牲になっています。

アジア・太平洋戦争では、日本人の 310 万人を含めて、2300 万から 3300 万人の人たちが犠牲になりました。

## ひと酷かった「満州」での小学生時代

私も軍国少年として「神国日本の歴史」というスパルタ教育を大羅勒密開拓団九州七郷国民高等小学校で過ごしました。全校生徒は 80 名ほど、しかし敗戦の一年前に沖縄と鹿児島県の奄美大島の人たちが大勢来られ、生徒数は百名を超えました。

全校生徒（本部部落を除く）は寄宿舎住まいです。月曜日に登校して土曜日に自宅に帰宅します。食事は寄宿舎の食堂で食べていました。戦争が激しくなるにつれ、お米が少なくなり、大豆、トウモロコシ、南瓜、ジャガイモが多くなって、副食は自分たちが学校の畑で造り食べることができました。

先生は全員軍隊上がりで、校長先生は奥さんを連れて赴任されていましたが、三人の先生は独身の若い先生でした。先生たちは厳しい軍隊生活でたたきこまれた体罰を生徒たちに加えました。小学校で生徒が遅刻や間違いをすると、ビンタや校庭を走らされました。

ある日、予科練（海軍飛行予科練習生の略称）になっていた青年の弟が、「石橋と同級生にいじめられた」と先生に訴えました。先生は私たちの弁明も聞かず、いきなり教室で私たち二人を平手でビンタを叩かれましたが、自分の手が痛くなったのか、角材を持って来て、私たちの頭を交互に叩きました。百回は数えましたが、同級生への百十回目の叩きで角材が折れてしまいました。頭はボコボコで凸凹、頬は紫色に腫れ上がりました。母は怒

り、学校に抗議しました。

夏の暑い日、放課後夕食後、10 数人で松花江に泳ぎに行きました、夢中で泳いで遊んでいるうち寄宿舎に戻ってきたのがまだ夕陽がある午後 9 時前でした。先生が旧校舎前の池で待っていて、私たちは一列に並ばされ、ビンタを張り全員池に落とされもありました。

### 予科練に憧れる

昭和 16 年 12 月 8 日未明、日本海軍がハワイ・真珠湾のアメリカ海軍を奇襲攻撃し、戦死した兵士は軍神として讃えられ、太平洋戦争に突入し、少年航空学校の誘いが強まり、先生からは再三、「よく学び、体を鍛え」＜予科練生＞になるよう勧められました。先輩一人が予科練に合格して自分のことのように喜び、君たちも予科練になれば、予科練の歌「若き血潮の予科練の 7 つボタンは桜に鎖、今日も飛ぶ飛ぶ霞ヶ浦にや、でっかい希望の雲がわく」と憧れました。

憧れた予科練でしたが、いま、茨城県阿見町は霞ヶ浦のほとりに「予科練平和記念館」が建てられ、後世に戦争の悲惨さを伝えようと阿見町が建設し、予科練の七つボタンの制服や資料が展示されています。

わたしも国民学校高等科 1 年生の終りに母に「少年航空学校を受験したい」とお願いしました。母は「兵隊に成ることだけが国のためになるのではないよ、百姓だって食料を作り立派な国のためになるんだよ」「志願して少年兵になることはあきらめなさい」と言いました。40 歳の若さで方正の伊漢通部落で亡くなった母を思い出します。

先生も次々に召集され校長先生だけになり、1944 年に鹿児島県の奄美大島の人達が開拓団にこられて、生徒も 20 数名増え、18 歳の女性代理教員が来られたが、自習時間が多く、また召集され家の農作業も増え。学校の農場の作業や軍事教練が多くなり、机に向かって勉強する自習時間も無くなりました。

高等科（小学校）の歴史教科書には、＜『御国の姿』日本は神国で今の戦争には必ず勝つ、「昔蒙古襲来」のように福岡県に上陸し荒らし回り、日が暮れて蒙古軍は一旦船に乗ったが、その日の夜半神風（台風）が吹いて数百艘の船は沈没した＞と記してありました。

日本の陸海空軍が鬼畜米英と戦っている大東亜戦争は必ず勝つ、と繰り返し強調され疑う者はいませんでした。

なぜ神風は吹かなかったのか？

神国日本が負けたのか、方正県を戦後逃避行の中、中国農家地主の家で働きながら、なぜ神風が吹かず日本は負けたのか？ 悲しくて夜も眠れない日もありました。

1931 年 9 月 18 日、奉天市（瀋陽市）郊外の柳条湖で日本軍（関東軍）が南満州鉄道の線路を爆破し、これを中国軍の仕業として柳条湖事件をでっちあげました。つまり満洲事変

によって、満洲全土を関東軍の支配下に置き、傀儡政府を作り、日本から 100 万戸 500 万人の開拓団移住計画を国の方針で進めました。

盧溝橋事件から中国全土への侵略戦争を拡大し、農村の若者が兵隊にとられ、開拓移民計画は頭打ちしていきました。開拓団の元気な男はほとんど招集され、病人か女子供だけになって、終戦後、どこの開拓団も『星火方正』で知られるように地獄の逃避行を続け、方正ではおよそ 5000 人が犠牲になりました。

### 先の戦争の教訓を忘れたのか！

戦後、太平洋戦争の教訓から、もう戦争はしないと誓い、日本では、1947 年新憲法を作り「われわれ国民はもう戦争はしない」宣言しました。

憲法の第 2 章では、戦争の放棄を明記し、第九条では、「日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。

前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力はこれを保持しない。国の交戦権は、これを認めない」と明記しました。

お蔭で戦後 70 年、新憲法のもとで「殺し殺される」ことがなく、私たちは平和に暮らしてきました。

ところが安倍政権になり、特に自公政権の暴走は、憲法を踏みにじって自衛隊をアメリカ軍とともに戦争ができるようにしました。

2015 年 9 月 19 日、安倍自民党公明党政権は、安保法・戦争法を強行成立させました。

多くの国民は怒り、国会前をはじめ全国各地で戦争法反対の集会デモ、全国の多くの法律家、科学者、文化人など国民の願いを踏みにじっての暴挙でした。

戦後歴代自民党政権でも、憲法を侵さず守ってきました。安倍自公政権は、憲法を踏みにじって軍事国家へまっしぐら議席数をカサに国会を暴走させてきました。「米軍とともに戦争する国」に仕上げてきました。

アメリカの戦争に世界中で協力する体制整備に乗り出し、憲法 9 条との矛盾が極限に達する中、憲法の条文そのものを変える明文改憲の姿勢が強まってきました。今年の年頭の会見、参議院決算委員会では「どの条項を改正すべきかという現実的段階に移ってきた」と答弁。1 月 22 日の施政方針演説で「逃げることなく」と言いました。国務大臣の憲法尊重義務（憲法 99 条）を無視しています。

自民党の安倍晋三はじめ閣僚や議員が加盟している、改憲右翼団体「日本会議」は、憲法 9 条改憲などの署名運動を全国的に展開し始めました。

安倍首相は、憲法を変えるために衆参両議院で 3 分の 2 を自公で獲得を目指す述べ、経済政策で、アメリカ、財界言いなりで法人税減税、消費税増税、2016 年度の予算案で突出して増額したのが、軍事費（防衛関係費）です。史上初めて 5 兆円を超えました。

安倍首相が言う「一億総活躍」は、「一億一心火の玉だ」（出生率は1,8倍に）、「生めよ増やせよ国のため」と同じように聞こえ、戦前を想わせます。

安倍政権が、昨年9月に強行した戦争法の実行を図るため、アメリカ製の高額兵器、オスプレイ4機(447億円)、戦闘機F35A6機(1084億円)、早期警戒機E2D1機(260億円)、対空型無人機クローバルホーク(146億円)の導入です。

思いやり予算はアメリカが増額を要求し1920億円となっています。憲法9条に違反して軍事費に支出です。

安倍自公政権のもとで、今再び、戦争への足音が高くなるなか、今年は参議院選挙で、戦争法に反対して共闘した野党が協力して自公の議員を追い落とし、そして、来るべき衆議院選挙で安倍自公政権を打倒し、戦争法を廃止し、平和な日本を建設しなければならないと思います。

(いしばし・たつみ：1931(昭和6)年12月(「満洲事変」の年)、福岡県八女郡星野村黒木谷(現在は八女市)で生れる。1953年中国から引き揚げ後は日本赤十字社にできた「帰国者協力会」で働く。その後日中友好運動に携わる)

.....

東京新聞 2016 年 4 月 15 日付(朝刊)より転載

残留孤児の体験記を日中両国語で本に いけだ すみえ 池田 澄江さん(71)

「残留孤児の悲劇を繰り返してはいけない」。体験記にそんな願いを込めた。

残留孤児は終戦時、12歳以下で、中国に残された人を指す。自身も終戦の混乱で残留孤児となり、中国の養父母に育てられた。帰国後はNPO法人「中国帰国者・日中友好の会」の理事長として、孤児たちの自立や交流に携わる。

体験を残そうと、自分を含め60～80代の孤児20人の体験談を中国語で書いてもらった。日本語訳を添え「私と私

の二つの故郷」と題して先月、中国で本となった。日本での出版も計画中だ。

自分は中国人だと思っていたのに、友だちから突然、「日本小鬼子」とののしられた人の話がある。

それを聞いた養母は、ののした子供の家に乗り込み「この子は人を殺したことも、放火したこともない」と懸命にかばったという。「養父母は、日本人の私たちを、強烈な愛で守ってくれました」日中関係は領土や歴史の問

この人



題をめぐり、ぎくしゃくしている。「二つの故郷を持つ私たちにとって心が痛みます。だから、この本で二つの国の間で起きた感動も伝えたかったのです」(五味洋治)

2016.4.15

## 戦後 70 周年平和祈念

### 満州開拓団の悲劇『声なき氷像』公演を終えて

市民劇団「あびこ舞台」代表 飯牟礼 一臣

アマチュア劇団ながら創立 24 年目を迎える「あびこ舞台」では、敗戦直後の満州開拓団の悲劇をテーマにした舞台劇『声なき氷像』を、東京、横浜、松戸、柏、我孫子など関東一円で、これまで 21 回にわたって上演してきました。

昨年は戦後 70 周年の節目。我孫子市最大・定員 550 名のホールで、第 1 部（満州編）・第 2 部（日本編）と新しく 2 時間 30 分の書き直した『声なき氷像』を、8 月と 12 月、それぞれ 1 日 2 回公演。いずれも多くのお客様にご覧頂きました。

この劇は敗戦直後の満州で 10 歳のとき、私が直接目にした満蒙開拓団の姿を描いたものです。

#### 「子供買うよ」とやってきた中国人

満州に攻め込んで来たソ連軍と、日本人開拓団に土地を奪われた恨みを持つ“満州人”、双方の攻撃を受けた開拓団員が北満から命からがら奉天（瀋陽）にまで逃げてきました。

着る物も全て奪われ、何ヶ月も風呂に入れず、体じゅう白いシラミがびっしり。冬の到来と共に餓死・凍死者が続出。避難民収容所には中国人が「子供買うよ」とやってきます。「せめてこの子だけでも生きていて欲しい」と預ける（売る）母親も沢山いました。後の残留孤児です。

ある冬の寒い日、ボロボロの服に真っ黒な顔、頭はシラミで真っ白、がちがちにやせ細った開拓団の女性が私の家にやって来ました。風呂に入って汚れを落とし、化粧を施し、母の派手な着物を着て出て行きました。女性を玄関から送り出した母は泣いていました。10 歳の男の子にそれが何を意味するのか分かりません。

そうか、そうだったのか。あの女性はソ連兵の慰安婦として徴用されたのか、と知ったのは大学生になってからでした。開拓団の悲惨な運命を、私自身の見聞も含めて一気呵成に小説にしました。幸い早稲田大学「小野梓記念文学賞」を受賞したこの小説を、戦後 50 周年、私が還暦の年に舞台化したのです。以後、あびこ舞台の看板作品のひとつとして上演を続けております。

#### 父を 70 年近く捜し求める

主人公は「シャオスーピン」（架空の村です）の開拓団にいた 5 歳の少女。父親は敗戦直前の根こそぎ動員で召集されます。この根こそぎ動員で、どこの開拓団も老人と女・子ど

もだけの非力な集団と化しました。5歳の少女は母親と共に必死で逃げながらやっと奉天まで辿り着いたものの、母親は抽選でソ連軍の慰安婦に徴用されます。

一方、父親が召集されて向かった関東軍は既に南に撤退した後でした。しかし撤退先は秘密。現地除隊の形で戻った開拓団も家は焼かれて無人。数ヶ月後、探し求めた避難民収容所で娘に再会。喜びもつかの間、妻が慰安婦となって自殺したことを知ります。体力をなくした父親が少女を中国人に渡した直後に、皮肉にも日本への引揚げ命令。娘を現地に置いたまま、断腸の思いで日本に帰国することになりました。

少女は中国人の家を脱走。別の日本人に連れられて福岡の孤児収容所に入れられます。そこから進駐軍のアメリカ人将校夫妻の里子として沖縄へ。

朝鮮戦争終了で里親が帰国した後、少女は基地のメイドとして働きながら黒人兵と結婚、黒い肌の女の子を産みます。黒人兵はベトナム戦争に派遣されて戦死。太平洋戦争＝朝鮮戦争＝ベトナム戦争と、自分とは直接関わりがない三つの戦争の狭間で、母親の自殺、中国人へ手渡され、アメリカ人の里子、結婚した黒人兵の戦死と翻弄されながら、自分を満州に置いて行った父親を70年近くにわたって探し求める“人生の軌跡”を描いた物語です。

### 好評を博した藤原作弥氏のミニ講演

『声なき氷像』は上演のたびに台本を書き直しています。今回は少女の父親が帰国後に再婚した女性が、ソ連軍戦車隊に虐殺された「興安街市民」の中でほんの少数の生き残りだったことを明確にしました。この虐殺事件は現場の廟の名前から「葛根廟事件」と言われています。

5年前に上演した時は多少ぼかした場所にしていたのですが、「方正友好交流の会」で知り合ったカメラマンの小西忠一さんが『声なき氷像』を観劇され、「これはまさしく葛根廟事件ではないか」と、毎年8月に目黒の五百羅漢寺で開催されている「興安街命日会」に私を招き、関係者の皆さんに紹介して下さいました。

この事件があったことはソ連も中国も認めず、犠牲となった人々の慰霊碑を現地に建立することすら許可してくれないのです。小西さんは数年前、逃げまどう日本人が隠れる所さえなかった広い草原をカメラに収め、「サンデー毎日」のグラビアページで初めて紹介したのでした。

そして昨年8月の『声なき氷像』上演の後、この劇を指導してくれたプロの演出家・貝山武久氏の中学校時代の友人が、葛根廟事件の数時間前にタッチの差で興安街を貨車で脱出、死を免れた人物だと言うことが判りました。この方が元日銀の副総裁の藤原作弥さんでした。

そこで12月の『声なき氷像』アンコール公演で、幕開けの20分間、「戦後満州の悲劇」と「李香蘭」について特別ミニ講演をして頂くことにしました。作家でもある藤原さんは『李香蘭 私の半生』の共同執筆者でもあります。私はたまたま藤原作弥さんの書かれた『李

香蘭 私の半生』と『満州、少国民の戦記』の2冊（いずれも新潮社刊）を30年以上も前に感動しながら読んでいたのです。偶然の邂逅と言うしかありません。

藤原さんは2014（平成26）年8月、『葛根廟事件の証言～草原の悲劇・平和への祈り』と題した電話帳のように厚い本の制作委員で、この本の序文とご自身の体験記を書かれています。しかもずっしりと重みのある本の表紙を飾った事件現場のカラー写真は、奇しくも「方正の会」でお世話になったカメラマン・小西さんの作品でした。世のつながりに不思議な縁を感じます。

お蔭様で1日2回の特別ミニ講演は、会場を埋め尽くしたお客様からも大好評でした。お渡しした謝礼は全額、藤原さんから中国残留孤児関係の団体に寄付されたそうです。

ちなみに「小野梓文芸賞」を受賞した小説と台本は、戦後学生劇団の資料の一つとして早稲田大学演劇博物館で永久保存されることになりました。3年ほど前に坪内逍遙の作品と共に展示される栄誉に浴しました。

私も80歳の傘寿を過ぎました。5年後に迎える戦後75周年まで生きているかどうか判りませんが、もし生きていたなら、戦争と平和の語り部のひとりとして戦後満州の悲劇を上演できたらと思っております。



舞台『声なき氷像』の一場面



講演する藤原作弥さん

（いいむれ・かずおみ：1935年、旧満州の新京（長春）生まれ。敗戦は奉天（瀋陽）で迎え、翌年の46年、両親の故郷である・鹿児島に引揚げ。元我孫子市会議員。『声なき氷像』は文化庁後援のアマチュア演劇祭で最優秀グランプリと最優秀脚本賞を受賞した）

## 自ら刺したトゲに……

### ＝徐士蘭の背負った悲劇＝

奥村正雄

あの日——からもう4年になる。新潟空港で再会し、徐士蘭が胸に飛び込んできて泣いたシーンが、今も鮮やかに蘇る。

10日間だけの祖国訪問の、翌日からの日程のトップに厚労省訪問を決めたのも、「あの緊張シーン」が頭にあったからだ。2007年の6月、中国・黒竜江省ハルビン市方正県のホテルのロビーで羽田澄子監督のロケチームがロケを終えて、いったんホテルに帰った時だった。それを待ち構えていた徐士蘭が、激しい口調で、自分が残留孤児であることを訴え、私の部屋に場所を変えてからも、一緒に来た長女をそばに座らせて、休むことなく、日本の厚労省が自分を孤児とは認めてくれない不当を、激しい口調で訴え続けたのだった。あのイメージが頭から消えなかった私は、厚労省訪問という気の重い日程をまず最初にクリアしたい、という気持ちがあったから、まずは第一目に厚労省訪問を決めたのだった。

だがこの私の予想は大きく外れた。

「私は日本に帰って来ることさえできれば、食事なんかとれなくたっていい！」

こんな、祖国日本へ帰りたい思いを口にしながら、口調も表情も、方正のホテルで見せた激しい剣幕は全く影をひそめ、いかにも物わがりのいい老人に変身していた。そばにいて拍子抜けするほどだったが、私はこの時、その理由がわからなかった。長年、夢に見てきた祖国日本に生まれて初めて身を置いたために、その感動が「自分を残留孤児とは認めない厚労省」に激しい言動を控えさせているのか…そばで、彼女を見守っていて、そんなことを感じていた。

厚労省で面談の時間が十分にあったのに、徐士蘭親子は、もうこれ以上、話さなくてもいいのか、という思いが私には残ったが、当の本人が、言葉でも態度でも「孤児である私を、厚労省はなぜ孤児と認めないのか！」という原点のやり取りを、いわば「敵の本陣」である厚労省で行わないまま中国に帰って、あとで後悔はないだろうかという懸念は、私には、正直、あまりなかった。厚労省と孤児本人の直接対話なのだから、当の徐士蘭さんが、言いたいことを言ってくれば、それでいいという思いで、私たちも厚労省を辞した。

#### ■ 厚労省を出て…

厚労省の建物を出た時、私には、

「やれやれ、一番、気が重い仕事が終わった！」

という思いがあった。

厚労省を出た後、日比谷公園のベンチに腰を下ろした。よくレイアウトされた庭園の色とりどりの花々、お昼休みで公園に来た官庁街のサラリーマンたちに音楽堂から軽快なメロデーが流れていた。私は見るともなしに、二人の様子を見ていた。厚労省でのやりとりにも不満が残って出てきたのなら、言葉には出なくとも、少なくともそれが、素振りや表情に出るだろう、と思った。が、二人は花が咲き乱れる公園で、花に目をやったり、木々の外側に立つビル街を見ながら、ゆったりとした表情を見せていた。

＜少なくとも、厚労省で徐士蘭が得ようとしたものが、期待に反して得られなかったという、後悔の気持ちがあったら、言葉にも表情にも、それが現れるはずではないか＞

そう思った。が、徐士蘭にも3女にも、そういう感じは少しも見えなかった。

しかし…私が本誌前号で指摘したように、二人が祖国日本に来る前に、厚労省がハルピンに出かけ、徐士蘭と彼女の出生の秘密を握っているとされてきた張文学さんを尋問することによって、その付与された役割が虚構と判明したのだとすれば…その上で訪ねた厚労省では、徐士蘭に、4年前に方正のホテルで見せた、あの勢いの激しい怒りが、本来それをぶつけるべきだった厚労省でみられるはずはなかったのだ。



徐士蘭が孤児だという噂を聞いていた  
知人に見せた、心からの笑顔

#### ■ ひとり孤独感に…

いよいよ日本を去る日、6月17日に、新潟空港のロビーで、ひとり長椅子にかけながら、徐士蘭が何とも言えない空虚な表情を見せていたのが心に残った。

初めて踏んだ祖国の、最後の時間の感傷にひたっている、などではない、もっと深く、空虚な孤独感を味わっていたのではないか…

間違いなく孤児でありながら、実母の手から養父母の手に渡された空白の時間を「創った」この一点のために、もう生涯、2度と申請をやりなおす余地などはない。この時、徐士蘭は、どの肉親とも、どの支援者とも共有できない、孤独の深淵の中にいたように思う。

# 奉天（瀋陽）、大連での子供時代を振り返って

## ——つれづれ思い出すまま＜満州覚書＞——

### 第二回 篠原 浩一郎

昭和 20 年 4 月から奉天の高千穂小学校に入学した。幼稚園があった弥生小学校ではないので少し不安だった。

父親は満州鹿島組の取締役土木部長で、満州鹿島組奉天営業所所長を兼ねていた。事務所と社宅が一体になった 2 階建てで、L 字型の一边の 1, 2 階は事務所、他の一边は社宅になって上下 6 軒ほどだった。敷地の中に平屋の家があり、保守の満人（編集部注：当時、“満州”にいた日本人は、現地にいた中国の人々をそう呼んでいた）の劉さん一家が住んでいた。どういう漢字なのか知らないがユースンという同い年の男の子がいた。彼の家は土間にかまどがあり、お母さんがいつも中華鍋でジャージャーと揚げ物をしていた。ねじり棒のお菓子とか、餃子とかもらうのが楽しみだったが、母親からは不衛生だから行ってはいけないといつも叱られていた。会社の中も子供たちの遊び場で職員たちもかわいがってくれた。

鉄嶺に社員旅行に行った。写真には 20 人ぐらい家族も一緒に写っているし、奥さんや子供たちの会合もしょっちゅう開かれて、会社と家族が一体になっていたようだ。

毎年、5 月ごろには蒙古風が砂埃を運んでくるので、窓ガラスにしっかり目張りをするのだが、畳はザラザラになる。風が収まると、社宅中が畳を裏の公園に持ち出して、たたいて砂埃を出し、干しているので、お昼は握り飯を公園で食べるのだった。子供には楽しい思い出だ。

### 箱娘というのを見たときは震え上がった！

蒙古風が過ぎると満州は夏になるのだ。その公園の向こう側には黒鉛の工場があり、真っ黒な顔になった満人の少年たちが塀の上から顔を出して大声でわれわれ日本人少年をからかっていた。人さらいがいるので、子供だけで外では遊んでいけないと口を酸っぱくして言われた。黒い綿入れ服の袖が鼻水でテカテカに光っているのを見ると満人が不潔だと子供心に思った。老人たちは道路に面したテラスで椅子に座り、スイカの種をぺつぺつと吐き出しながら、ガラスのコップの水をゆすっている。中に入った金貨のくずを集めているのだとか聞いて、なんて細かいのだろうとあきれた。

見世物で箱娘というのを見たときは震え上がった。小さい時から箱に入れて育て、体格が箱のように四角くなっている。さらわれるとああいう風になるのかと恐ろしかった。真っ赤なサンザシを串にさして糖蜜をつけたのはとても甘くておいしいのだが、これまた不潔だ、チブスにかかると思うと許可が出なかった。

## 奉天（瀋陽）で過ごした日々

奉天の冬は寒かった。耳を覆う防寒帽をかぶり、綿入れの防寒服、大きな革靴を履いて、昭和18年2月1日生まれた妹と母親を見舞いに父親に連れられて満鉄病院に夜出かけたが、とてつもなく寒く、泣いていやだと駄々をこねたのを覚えている。ぎらぎらと輝く星が睨みつけているようで怖かった。

夫が撫順炭鉱の役員をしている大叔母の家にアジア号に乗って遊びによく出かけた。私と弟は撫順の満鉄病院で生まれ、母と子供たちはこの家で産後少しの間、過ごしたらしい。二人の美しい女学生の叔母たちはグリコのおまけを集めていて、それをもらうのは楽しみだった。

発電所の独特の煙突が見えるので、撫順に汽車が近づいたのがわかる。まくわ瓜も美味しかった。叔母の許嫁<sup>いいなずけ</sup>の海軍士官がパリッとした礼装に短剣を吊って現れた時には狂喜して、一生懸命戦車の絵をかいいてサービスしたが、彼は南天の絵を描いてくれた。軍艦の絵じゃないので大変不満だった。

奉天の家には篠原本家の文夫さんが遊びに来たことがある。真っ赤な手拭いに黒いドクロの絵がある、長崎医専の手拭いを腰にぶら下げていた。両親が彼は「シュギシャ」（編集部注：当時、社会主義や無政府主義などを信奉する人をそう呼んでいた）だと噂していた。あとで、原爆で死んだと知った。長崎大学の校庭にある墓碑に名前を見つけた。

昭和18年には、父方祖母を見舞いに父親と長崎に行った。関釜連絡船の船室にぶら下がったお土産の雉が、夜中目が覚めるとにらんでいるので怖い怖いと騒いで父を困らせた。祖母は喉頭がんで首に四角い穴が開いており、本当に気持ちが悪かった。

母方の祖父母は長崎の城山に住んでおり、大歓迎してくれた。42歳で満鉄を定年退職した祖父は世界一周をしてきた。一高時代は杉浦重剛の称好塾にいて初期の東大採鉱冶金卒の天下国家を論じる事が好きなこの人に、九大土木卒の素朴な我が家の父親は可愛がられたようだ。祖父母は原爆で焼け死んだ。父親は優しく子供と遊んでくれた、餃子を皮から作ったり、赤や青、白の寒天を作ってくれた。おもちゃを入れる赤と緑の車を作ってくれた。砂場で立派なトンネルを作ってくれるので自慢の父親だった。

## 出張時にはピストルを携帯していた父

昭和19年の暮れに令状がきて軍隊にとられたが、検査で重い肺病がわかり即日帰ってきた。間もなく大連に転地療養する事になった。奥地からスッポンを取り寄せて血を飲んでいた。隙箱に入れられたスッポンがごそごそ動くのが気持ち悪かった。首を切って血を抜くところは見せてくれなかった。父親は出張にはピストルを持って行った。我が家には200人余りの労働者と兵隊が並び、列の両側に立てた杭に匪賊の首を晒した写真が数枚あった。満鉄の鉄道の延長工事はどんどん奥地に伸び、人里離れた現場では労務者の給料が10日ごととに支払われるので、その金を狙って数百人の匪賊が襲ってくる。割り当てられた4、5人の兵隊と働いている人たちが銃をもって応戦し撃退できると生き残った喜びのあまりこ

うした写真を撮っているのだそうだ。負ければ皆殺しで、人質をとるような近代的なことはしなかったようだ。

ある日、B29 の編隊が空を横切って行った。水豊ダムを爆撃するのだろう。高射砲を撃つが届かない。日本の戦闘機が何機か舞い上がっていったが、相手にならない。そのうち一機が体当たりして、ひらひらと落ちてきた。B29 も一機落ちてくる。大人たちはみな歓声をあげて走っていった。帰ってきた大人の話では、体当たりした日本の飛行機を操縦していたのは満州人の中尉だと言っていた。こんな名誉の戦死を満人に奪われたのが口惜しいと思ったのを覚えている。バリバリの植民者少年だったのだ。

### クラスにはロシアの女の子もいた

昭和 20 年の 7 月に大連に引っ越した。大連病院の前の薩摩町という住宅街だった。隣は村井さん。その向こうが柳瀬さんの家で同級生の飛行<sup>ひこう</sup>君がいた。大広場小学校の 1 年生に昭和 20 (1945) 年の 2 学期から入った、担任は山田勇というきれいな女の先生だった。男のような勇という名前をなんと読むのか聞いたかったが、聞きそびれたのが今でも残念だ。

クラスには白系ロシア人の女の子が二人いて、一人はアレキサンドリアという大柄で、プラチナブロンドとでもいうのだろうか、眉も白いいかにもロシア人という顔だった。男子のだれも喧嘩を吹きかける勇氣はなかった。遊びではいつも中心になっていた。

さらに一人はオリガと言ってお父さんは自宅で歯医者をしていた。こちらは背丈も同じぐらいで親しみやすかった。遊びに行って、便器が広いお風呂場にあるのでびっくりした。オリガの家は鏡が池に面した茶色のアパートの 2 階だった。

満人も漢人もクラスにはいなかった。日本人では桜井さんというきれいな女の子がいたが、話をした覚えはない。クラスには避難民で骸骨のように痩せた男の子がいた。奇妙におなか膨らんでいる。体操の時間は見学だったが、みんなと話の輪に入っていた。原口君という男の子は、引き上げ後の福岡県久留米市日吉小学校 3 年生でまた同じクラスになったので奇遇に驚いた。

読本では、守備隊の兵隊さんの話が印象に残っている。城壁の上で銃を肩にかけて歩哨をしている、姿が印象的で、在満の日本人を守ってくれているのだと感謝した。そのほかの授業は覚えていない。

子供たちは隣近所でまとまって遊びまわっていた。アカシアの並木はあるし、通りは広いし、大きな大連病院をはじめきれいな家が並んでいるので、奉天よりはるかに美しいと思った。引っ越した夏、まだ元気だった父親に市街電車で星が浦の海水浴場に連れて行ってもらった。父親が突然、栈橋の上から突き落としたので、必死になって泳いだ。父親を少し恨んだが、おかげでいっぺんに水泳を覚えた。あの夏は大勢の白系ロシア人たちも海水浴を楽しんでいた。大連は美しかった。

## 日本敗戦後の大連の日々

終戦になると子供たちの生活はむしろ楽しくなった。大人から、ああしろこうしろ、あれをやってはいけない、兵隊さんを見習いなさい、などと言われないので、自由奔放に遊べた。

冬になると凍った大通りを下駄の裏に竹をつけてスケートする人もいたが、子供たちはどこからかスケート靴の古いのを引っ張り出して、刃を外してリング箱の底に取り付けてそり橇にして遊んだ。我が家の裏の道は人通りも少ない坂道なので格好の橇遊び場だ。ものすごいスピードでT字路の積み上げた雪の中に突っ込んで、雪まみれになって笑顔でみんな順番を争って遊んだ。冬になると運動場が水を撒いてスケート場になったのはびっくりした。

戦後、大連の我が家には二人のおじさんが居候していた。父親のもとで苦力（クーリー）を集めて現場に送り込む仕事をしていたらしい。荒牧さんは行儀作法にうるさく父親が寝ているので子供のしつけがなっていないと母親をけなして、私に箸の上げ下ろし、道を歩くときは三步下がって師の影踏まずとかうるさかった。大嫌いだったが、おかげで少しはしつけが身についたように思う。

日本は食糧難らしいから、塩漬けのサバを送ると大儲けできると聞きこんできて、父親に仕入代金を出してもらい、機帆船一杯分のサバを仕入れたのは良いが、米国軍艦の警備が厳しくてだめになった。庭の石炭小屋いっぱいになった塩サバが我が家の食事になった。蛆がわいたサバの蛆をせっせとつまみ出して毎日食べていた。今でもサバは好物だ。

お米は手に入らないので、高粱飯や粟飯だったが、粟飯は食べたものではなかった。荒牧さんが大豆油の搾りかすをどこからか手に入れて来てくれた。直径1メートル、厚さ10センチぐらいの円盤状でカチカチに固い。金槌で碎いて食べるのだが、腹がすいてしまい、時には押し入れに潜り込んでかじりついたものだ。おかげで今でも歯が強い。妹に回虫が湧き虫下しを飲んだら、小さな体からバケツ一杯のうどんのような回虫が出てきた。三男の昭三が生後2か月で死んで火葬にしたとき子供の骨を食べると早く日本に帰れると信じて、おじさんの一人の木谷さんがこっそり食べてしまった。さすがに母は泣いて怒り追い出してしまった。

## 「うちの子供にならないか？」という満人のお婆さん

我が家もお金が無くなったので、荒牧さんが仕入れてきた南京豆（落花生）を新聞紙でくるんで、街で売ることにした。小さい子供がいる方が売れると聞いて、5歳の弟を連れて街に立って売った。売れると道端で売っている古本から、父親が喜びそうで、私にも読める本を買ってかえり、父親に読んで聞かせるのが仕事だった。覚えているのは「東海道中膝栗毛」「源平盛衰記」「少年文学全集」なんかで表紙が取れているのが多かった。枕元で大きい声で読むと、浩一郎は読むのが上手だとほめてくれるのでうれしくて毎日読んでいた。後年、全学連のアジテーターになったのはひょっとするとこの経験が生きているのかもしれない。

道に立っていると満人のおばさんが、日本に帰っても食糧が無くて飢え死にするから、あなたたち子供はうちの子にならないか？ と言ってくれた。大人は帰らなくてはならないが、子供は帰らなくても良いのなら、弟と妹3人で満州に残った方が良いのではないかと真剣に考えて、母親に相談したら叱られた。危なく残留孤児になるところだった。

昭和22(1947)年1月15日、父親が死んだ。ペニシリンという薬があれば助かったのだと言われたが、手に入るはずもなかった。粗末な棺桶に入れて釘を打つのは金槌ではない、石で打つのだとかおじさんに叱られながら、拾ってきた釘を打った。リヤカーに積んで焼き場に向かった。焼いている炎を眺めながら我が家は私が守りますとわけもわからず唱えていた。

死んで間もなく引き揚げが決まり、港のそばの収容所に向かった。柳行李一つと父と昭三の遺骨、胸には長崎市鳴滝町826番地と書いた名札をつけて、収容所に向かった。

船は明優丸という大きな貨物船で、船倉を何段にも仕切り雑魚寝するのだ。船酔いの母をおいて弟と船の中を駆け回った。大きな釜で蒸気で炊いた混ぜご飯は、久しぶりの米のご飯で美味しかった。3日ほどの航海だったが毎日水葬があった。後少しで日本に帰れたのに可哀そうだと同情を誘っていた。

### 「日本の子供は楽でいいなあ」

夜は碎ける波が夜光虫で煌めき、いつまでも眺めていた。博多港では検疫のため2日ほど上陸が出来なかった。港の収容所に入り、母親が長崎の状況を調べて帰ってきて、母方の祖父母の家は原爆で焼けた。父方の祖父の家は原爆で焼け出された人たちが満員で我々が入れる余地がないので、母の兄の奥さんの実家が福岡県久留米で医者をしているのでそこに転がり込む事になった。そんな遠い親せきが親子4人を引き取ってくれるのは有りがたいことだと言われて、「お世話になります」と挨拶したら、こましゃくれていると笑われた。

4月から久留米市立日吉小学校に入る事になったが、引揚者は1年下に入れると言う話が出てきてどうなるかと心配したが、ちゃんと3年生に入れる事になった。同級生が話す久留米弁が難しかった。こちらは「ラジオの真似をしている」といじめられた。しかし、日本の子供は楽で良いなあと思った。さらわれる心配もない、持物をかっぱらわれる恐れもない。子供だからとお菓子をくれる、怪我したらすぐ手当をしてもらえる。学校と遊ぶだけが仕事だ。朝鮮戦争で米軍が釜山まで追いつめられた時は、久留米は危ない、早く本州にでも逃げまじょうと大人たちに提案して、笑われた。(了)

(しのはら・こういちろう：1938年、旧満州の撫順で生まれる。1960年の安保闘争では全学連の中央執行委員、社会主義学生同盟の委員長として活動。その後、機械メーカーなどを経て、現在はNPO法人BHNテレコム支援協議会理事)

# 三橋文子さんの手紙

川合 継美

2004 年、秋の訪れを感じ始めた頃のある日、私は見知らぬ女性から一通の手紙を受け取った。

差し出し人は、三橋文子さんとある。手紙を読み終えて、私は何と不思議なことだろうと驚きと当惑を覚えずにはいられなかった。

手紙の書き出しから、謙虚で慎ましい人柄を感じることが出来る。三橋さんは近くの図書館で、私の著書『風の鳴る北京』を読んだこと、そして、読み進むうちに手が震え、胸が高鳴った、とその衝撃の強さを述べていられる。それほどの衝撃を受けた内容とは、私が父、梨本祐平の著書『中国のなかの日本人』の一文を引用していた部分についてであった。

私は 13 歳の時に、中国北京で終戦を迎えた。父は大陸農業経済研究者であったが、日本の敗戦により中国侵害罪に問われ、中国の憲兵隊に捕らわれて死刑の宣告を受けていた。しかし、父は中国大衆の熱い助命嘆願運動により無罪釈放となって祖国の地を踏むことが出来た。

三橋さんの兄上は、戦時中、北京、天津で憲兵をしていられたとのこと、三橋さんは終戦以来ずっと、兄上の身を案じ続けてこられたが、杳として、その行方が分らず、憲兵は、皆、処刑されたと聞いていると書かれていた。本当に優しい兄で、早くに父を亡くした自分にとっては親代わりのように慕い続けていたとも懐古していられる。

三橋とは嫁ぎ先の名前で生家は渡辺という。

父は著書の中で渡辺氏という元憲兵の死刑執行に立ち会った時のことを記していた。死刑が執行される時は、やはり、死刑宣告を受けた者が刑場まで添って行く慣習があり、父が立ち会った。執行が終わると死体を布か何かで包んで三里ほどの道を引きずって焼き場まで運んだそうだ。渡辺氏が死刑執行される時、父は思わず、「渡辺君、しっかりしてくれ」と叫んだとある。三橋さんはその部分を読んだ時、自分の兄に違いない、と思いこんでしまった。読む進むうちに手が震え、胸が高鳴るのも無理からぬことであろう。そして、この本に出会えて本当に良かった、兄の導きである、と結ばれていた。

今度は私の方が心臓が高鳴った。渡辺という苗字は、そんなに珍しくはない。父が最期を見届けた渡辺氏が、果して、その三橋さんの本当の兄上なのだろうか。今となっては証明するものは何もない。私は何と答えれば良いのだろう。「貴女のお兄様に違いありません」とも「いいえ、間違いです」とも言えない。こんな本、書かなければ良かったと思った。

数日後、私は返事を出した。

先ず、三橋さんの手紙を拝読して、私も大変に驚いたこと、でも、父が死刑執行に立ち合わされた渡辺氏が、本当に貴女のお兄様であったかどうか、私には何とも申し上げようがないと書いた。しかし、三橋さんの確信は動かなかった。

それからのち、6 通の手紙が私のもとに送られてきている。

渡辺氏のお母様が 84 歳で他界なさるまで息子の生還を待ち続けていらしたこと、ご自分もお兄様の消息を知りたいばかりに図書館に足を運び、北京、天津に関する書物に目を通し、

そこに印刷されている寺や墓地、兵隊たちの写真があれば、どこかに兄がいないかと一人ひとりの顔を確認していたこと、など等が次々に手紙で語られてきた。

そのたびに私も返事を送った。

4通目の手紙には、市役所の幹旋で団体で靖国神社に参拝し、遊就館も見学してきことを報告してきた。その時、兄のキャビネ判の写真も飾ってもらえることになった。自分には難しいことは分らないが、とても嬉しい、と書かれていた。

その年の3月に、兄を靖国神社に納めることが出来たと言ってきた。靖国神社にお兄様が祭られた番号が77番、三橋さんが大好きな番号で、自分の目の届く所にあったことから62年ぶりの再会であり、恩返しであった、とも記されていた。また「私の生きているうちに、と兄が訴えてきたように思えてなりません。17歳の10月10日、出征日に別れてから61年、黄泉の国で雑談にも入れず、ひとり、寂しく中国で、と思うと胸が痛みます」とも綴られていた。

渡辺氏の出征後に女の子が生まれたこと、兄は北京から自分の名前の一字をとって幸子と名付けるように言ってきたので幸子と名付けた。本当に心の優しい子で叔母の自分を、とても大切にしてくれると感謝の言葉も書かれていた。そして、この『風の鳴る北京』は兄の形見です、と結んでいる。

その年の4月2日、親戚の人たちが水戸から車で靖国神社に連れて行ってくれるという。

父が最期を看取ったという渡辺氏が、本当に三橋さんの兄上であったのか、或いは別人であったのか、私としては、どちらとも分からぬままに文通が続けられていた。実の兄と思うことが、三橋さんの心の慰めとなるならと、私も、そう思うことにしてきた。

その後、大きな箱が水戸から届いた。箱の中には、水戸の名物が一杯に並べられていた。年をとって、手が震えて字も書きにくくなりました。これで、おしまいに致します、と感謝の手紙を添えられていた。

三橋さんが、自分のことのみを考えている人ではないことが最後の手紙に証明されている。「戦争のない地球、日本全国の皆さん方にも良い年が来ますようにと祈ります」。

しばらくして、三橋さんの姪の幸子さんからも手紙が届いた。叔母様にそっくりの優しい文面で、父親を知らない胸のうちも切々と綴られていた。

戦争がもたらした悲劇はさまざまであり、また、数知れない。

三橋さんのように、人に語るに語れず、もどかしい思いで兄の行方を追いつけた姿も、水草のような切なさではあるが、やはり、戦争がもたらした悲劇の“ひとまく”と言えるのではないだろうか。死刑に処せられた渡辺氏が三橋さんの本当の兄上であったのか、または別人であったのか、全ては神のみぞ知るであろう。いずれにしても、そのみ霊の安らかならんことを、日々、祈るのみである。

(かわい・つぐみ：1934年横浜に生まれる。1歳半の時に両親と共に中国大陆に渡り、日本の敗戦まで北京で過ごす。著書『風の鳴る北京』、日本に在住していた中国の甲骨文字学者、欧陽可亮の伝記『同舟 欧陽可亮伝』がある。現在、東京郊外に在住)

# フィリピン・ミンダナオ島から引き揚げた私

丹野 雅子

私は、昭和 11（1936）年 12 月 27 日、フィリピン・ミンダナオ島タバオ市ミンタルに生まれた。

大正 9 年頃というから 1920 年頃だろうか、祖父（母の父）は、フィリピン・ミンダナオ島のタバオに移民として渡った。そこで、バナナの葉に似た葉、マニラ麻（現地ではアバカという）やラミ麻、果樹園、家畜などの事業を展開し、後には日本人小学校、二校を設立した。

私は小学校の 1 年半までミンタル小学校に入学し、楽しい幼少時代を送った。

昭和 16（1941）年、太平洋戦争が始まるからと、両親は私の兄（昭和 6 年生まれ）、姉（昭和 8 年生まれ）の二人を福島市の実家へ、両親の名代として祖父母のもとへ農家の後継者として送った。

## アメリカ軍の襲撃が始まった

戦争が始まり、アメリカ軍の攻撃を避けるため、私たち隣組の一団の逃避行が始まった。両親と 8 歳の私を筆頭に、妹 6 歳、4 歳と 3 歳の弟、1 歳に満たない妹などの計 7 人の逃避行である。

何も知らず、ただただ、大人に付いて荒野や密林地帯、果てしないはげ山を蟻んこのように岩にへばりついて逃げた。米軍機に見つからないように、手をつなぎ、身を隠し（肌山だから隠れられないが）、それは壮絶だった。

米軍機の B29 は、グービューンと上空を旋回する。知ってか知らずなのか。見えたのか？ 小さな子どもだったからか、その程度だったのか？ 今思うとぞっとする。必死である。良く生き延びられたと思う。

ミンダナオ島の六つの地区を移動し、乳幼児たちは大人に肩車をされ、抱きかかえられて逃げた。大きな石がごろごろしている。河は急流であり、水深が深ったり、時に大ワニだっている。もう言葉には表現できない。人間って強いな！

## ミンダナオ密林・ジャングル・サバイバル逃避行

熱帯特有のジメジメした熱い空気、道なき道を移動する。

両親と私は、乳幼児たち弟妹をジャングルに残して、食料や生活用品をリレーして運ぶ。一人ひとりがジャングルの木に目印をつけ、目立つ赤い布をしばり付けて、初めて通るジャングルをバトンタッチして帰って来るのだ。迷路のようなジャングルをなんとか帰ってくるのだ。妹たちのもとへ帰りつくと、怯えたまなざしでしっかり抱き合っ

待っていてくれた。心臓がえぐられる思いをした瞬間だった。しっかり抱いてやって背中をさすってなだめてやった。母が私を見て、「8歳のおかあさん」と微笑んでくれた。

ある時は米軍機の爆撃音が鳴り、身を伏せる。ある時はジャングルの色鮮やかな小鳥たちのさえずりに、またある時、モンキーたちが高いところで美味しそうに木の実を食べているひとときに慰められたりもした。つかの間の光である。

熱帯特有のスコールは、容赦なく幼い子たちにぶち当たる。ぐしょ濡れで泥ネズミのようになる。ジャングルでは火は焚けない。敵陣に見つかるので山では火炎は出せない。

谷底へ何キロも下山して水を汲みに行く。食料調達で彷徨う。ほどなく山を下ると沢があり、水が流れていた。アッと思わず声が出る。谷の水たまりに大きなオタマジャクシが10匹ほどいた。とっさに閃く。しっぽを魚のように食べられると、心が豊かになり、オタマジャクシを抱えて一目散に待っている妹弟たちのもとへ駆け込んで帰った。グルメの夜で一夜が明けた。

### 味をしめた心はまたジャングルへ食料調達に・・・

パパイヤの木が目に入った。実を食べられるので毒ではないと、8歳の我が輩の心は男になった。根っこを掘ってみようと、夜、根っこを焼いたりゆでたりして食したら、もう絶品であった。命がまた一日延びた。ホッとした。ずっと逃避行である。昼のジャングルに日本の兵隊が二人歩いて来た。

あっ！ 日本兵だからと安心した。彼らはあたりを見て帰って行った。その夜、兵隊たちは、わが家に強盗に入った。食料調達でジャングルを物色していたのである。わずかにあった米などを持って行った。(その時は、すでに終戦になっていたのだと、戦後70年目でようやく分かった。我が家では戦争の話はしなかった。しかし昨年の戦後70周年の年、私はかなり関連の本を読み、分かったのだ)

その夜、父はマラリヤで息も絶え絶え「お父さん死んじゃだめ」と私は言った。今思うと、8歳の私は遠い日本の国を知らなかったのである。心残りは、日本という国を知っていたら、せめて一言、「日本へ帰ろう」と父に言って捧げられたのに。

その翌朝、父は穏やかに終戦を待たずに、昭和20年8月1日、天国へ・・・しばらく日が過ぎ、あまりに周囲が静かになったので、ジャングルの広場に出て様子を伺っていたところ、米軍機は白いビラを撒いたので終戦を知った。ジャングルを出たら、米軍の長距離トラック、10輪車がやってきて難民を收容し、果てしない荒野にあるテント收容所へ連れていかれた。9月初めのことだった。

運よく1ヶ月の收容所生活で日本へ帰れることになる。ダリアオン收容所で一か月を過ごし、10月にダリアオンの砂浜から沖に停泊している米軍輸送機へ3000人ほど乗せ

られた。生まれ育ったミンダナオ島のダバオを去る。

夕闇がダバオ湾を覆った。私たち家族は円陣を組んでダバオ湾が見えなくなるまで別れを惜しんで日本へ思いを馳せるのだった。

船の中で死亡すると毛布に包まれて縄でぐるぐる巻かれ、おもりをつけて海に沈め、海葬されるのである。末の妹レイ子は、地球の天使になった。

### **福島家族たちは暖かく迎えてくれた。**

日本に第一歩を踏み込み、想いのとどく日だった。

九州鹿児島県の加治木港へ着き、初めて日本食の真っ白なお米（おにぎりや真っ黄色い東京たくあん）を食べた。一生忘れることの出来ないグルメとなった。

福島では温かく迎えてもらった。食料不足で時には、さつま芋の苗床にある種芋のガリガリは美味しくはなかったが、ジャングルと違って、家に屋根があって家族がいて、お風呂があった。生きる術があった。日本人に生まれて良かった。

しかし、母はおばあちゃん（姑）と折り合いが悪く、母は家を出る。

家族に手製のタビやら学用品などを風呂敷に包んで会いに来る母、私に直接でなく、同級生を介して学校の門で受け取ってもらうのである。

「おしん」のような生活であった。そんな同級生とは今も、兄姉以上のお付き合いをさせていただいている。物語はいっぱいある。感謝の一言でございます。ありがとう。

（たんの・まさこ：1936 年、フィリピン・ミンダナオ島で生まれる。1945 年帰国。福島県で育ち、郡山の日東紡績(株)や東京のデパートで企画・宣伝業務等に従事。全国ダバオ二世の会で 1993 年、48 年ぶりに墓参と慰問のためフィリピンを訪れた）

## 周恩来と国際主義的精神 (第3回)

大類 善啓

### 《前回までの粗筋》

本稿は本誌 20 号の第 1 回に記したように、本来は若い研究者を中心に発行する予定だった『日中の未来を見つめる 日本人公墓—中国黒竜江省方正県』(仮)の最終章に入れるべく書いたものである。しかしこの企画は残念ながら実現できず、拙文を独立して本誌に掲載するものである。本稿は、日本人公墓建立を許可した周恩来の国際主義的精神がどのように形成されていったのかをまとめたものであり、周恩来の伝記として書いたものではないことを改めて記しておきたい。

さて以下は、前号までの粗筋である。

周恩来は天津で南開中学に入学した。天津はイギリスやフランス、日本などの租界があり、国際的な知識を得るには恰好の地でもあった。そして日本へ留学し、社会主義思想に目覚めた。日本では米騒動も起り、周も影響を受ける。1 年半ほどの日本体験を終えて帰国した周に待っていたのは「五四運動」である。この運動の過程で生涯を共にすることになった鄧穎超に出会った。その後、ヨーロッパで働きながら学べる「勤工儉学」という留学運動もあり、パリへ向かった。このパリ時代に英文でマルキシズムに親しみ、アナーキズムなども研究し、中国共産党に入党し国際主義的な精神を身につけていった。そして 4 年間のヨーロッパ生活を終えて中国に戻った周は、西安事件で卓越した交渉術を発揮し、「中国に周恩来あり」と世界に知らしめた。その後、毛沢東を支えて国民党との闘いに勝利した。

### 16) 新中国の第一線として世界へ

1949 年 10 月 1 日、毛沢東は北京の天安門広場で、中華人民共和国が成立したことを宣言し、「中国人民は立ちあがった。何人も二度と我々を侮辱することはできない」と、広場を埋め尽くした人民大衆と世界に向かって告げた。毛沢東のそばにいた周恩来は、このメッセージを世界中に発信させるよう手配した。

毛沢東が主席、周恩来は総理として中国内外の政治活動の実務面を一手に引き受けて指導に当たった。外相は陳毅が一時務めることはあっても、周恩来は外交面でも遺憾なく中国外交の牽引車として先頭に立った。

新中国の存在を世界に示すべき国際会議では、周恩来はその行動、演説、風貌も含めて、その存在がひとときわ光っていた。1954 年春には、朝鮮戦争の処理とインドシナ和平に関するジュネーブの国際会議に、150 人のスタッフを引き連れて臨んだ。この会議は新中国の成立後に開かれた重要な会議だった。

またジュネーブに滞在する外国の文化人などとも交流した。その時の客人の一人が世界的な俳優であり映画監督のチャーリー・チャップリンである。

アメリカに吹き荒れた反共攻撃、マッカーシズムの嵐でアメリカを離れたチャップリンと周恩来は親しく話し、「ぜひ中国にお出でください。あなたは大変な人気なんですよ」と周はチャップリンに語っている。(ハン・スーイン著『長兄』)

翌年の1955年、インドネシアのバンドンで開催されたアジア・アフリカの国際会議では、ひととき周恩来の演説に各国の外交官はひきつけられた。とりわけ、インドとパキスタンに対する外交では心を配った。パキスタンの歴代大統領は周恩来の人柄に魅せられ、その一人であるヤヒア・カーン大統領は、後にキッシンジャーの極秘訪中を仲介する役割を果たしたのだった。

## 17) 反右派闘争から文革終了まで、人々を助けた周恩来

「大躍進政策」の失敗により毛沢東が主席の座を降り、劉少奇が主席になって主導した経済調整政策は一定の成果を見せるようになった。そこには一部の私有制を認める政策も採用された。しかしこのような政策は毛沢東にとって「資本主義の道」を歩む政策に見えてきた。実権を奪われた個人的な恨みと「修正主義」の道を歩む劉少奇・鄧小平路線は、毛沢東にとって何としても阻止しなければならないものだった。

党内の実権をほとんど奪われていた毛沢東は、思想的に“うぶな”若者を動員して党中央を糾弾するしか方法を見つけないままだった。「紅衛兵」と呼ばれる青年と学生たちは、カリスマ的な毛沢東の催眠術にかかったように、激烈に「党内の資本主義を歩む実権派」に暴力的に挑みかかった。

劉少奇は批判集会で吊るし上げられ、獄中に繋がれた。鄧小平は失脚させられた。党内にいた大幹部たちは、ことごとく紅衛兵ら武闘派の打倒対象になった。

周恩来は全身全霊をかけて古参幹部たちを守るべく活動した。葉劍英、賀竜ら長征時代からの大幹部をはじめとする人々から無名の人々まで、周恩来に救われた人たち（賀竜は残念ながら死亡してしまったが）を列挙すれば紙数はいくらあっても書き尽くすことはできないだろう。

時代は前後するが、私が驚いたのは宿敵・蔣介石の妻だった陳潔如を保護した事実である。中国研究家の家近亮子氏がアメリカで蔣介石の日記などを調査して発表した『蔣介石の外交戦略と日中戦争』で明らかにした事例のなかに、周恩来の陳潔如に対する濃やかな気遣いが書かれている。

1927年、陳潔如はアメリカのコロンビア大学に留学後、上海に戻り蔣介石の仕送りを受けていた。彼女は1949年12月、台湾に渡ろうとしたが宋家の圧力もあり行けず、上海に居住し上海市滬湾区政教委員などに選ばれていた。1956年、学術分野で自由に発言や発表することを許した“百花齊放・百家争鳴”運動が始まったところ、知識人たちは共産党の官僚主義など、厳しい共産党批判を展開した。その攻撃ぶりに危機感を募らせた毛沢東は、

そんな知識人たちを弾圧した。1957 年から 58 年前半までの毛沢東の“ブルジョア右派”に反対する、いわゆる反右派闘争である。多くの知識人たちが弾圧されたが、その攻撃の波は陳潔如にも及んだ。陳潔如は 1961 年 12 月、周恩来の勧めで上海から香港に移り住むことにしたのである。

## 18) 文革期における周恩来への評価

多くの人びとが周恩来によって命を救われたが一方、なぜ周恩来は毛沢東の文革活動を諫めなかったのかという意見もある。これについては、周恩来が文革活動を阻止するような行動に出た場合、すぐさま劉少奇のような運命に見舞われたらろうという意見がほとんどである。

鄧小平は文革が収束された後、イタリアのジャーナリストであるオリアナ・ファラチの「周恩来は一貫して舞台の上におり、一貫して権力の座にいた。時には彼は困難な立場に立たされたとはいえ、彼が当時のあの誤り（文化大革命を指す）を是正できなかったのはなぜか」という問いに次のように答えている。

「“文化大革命”の時に、われわれのような者はみな下りた。幸い彼は残った。“文化大革命”において彼の置かれた立場は非常に困難であった。多くの心にもないことを語り、多くの心に違うことをやった。しかし人民は彼を許している。というのは彼がそれをやり、その話をしなければ、彼自身がポストを守れず、そのなかで中和作用を果たし、損失を減らす役割を果たすことができなかったであろう。彼はかなり多くの幹部を保護した」と語っている。（矢吹晋著『文化大革命』）

毛沢東は急進的に文革を推し進める一方、周恩来が中国を統治するにはかけがえのない人材であることを十二分に知りぬいていて、文革を収拾できる男として周恩来を残していたともいえるだろう。

確かに周恩来にとっても文革は苦しい時代だった。前述の 4 夜連続で放送された NHK の番組を見ると、こんな場面が出てくる。

周恩来の姪、周秉徳が「過激派の行動を見て文革に疑問をいだき」周恩来に質問した。すると周恩来は「君は誰か上司に言われてきたのか」と問い、彼女は「違う。納得できなかったのだ」と答えると周恩来は、「正直に言うと私も文革についていけない。だが晩節を消極的に生きるつもりはない。積極的に革命を貫徹すべきなのだ」と答えた、と姪は語っている。

周同宇の三女周秉建もこう語っている。「劉少奇が党を除名された時、周も賛成した。仮に周恩来一人が手を挙げなかったとしても、あの局面を変えることはできなかったろう。国や民衆が分裂し内戦になり、派閥が乱立して全土は混乱しただろう。恥を忍んで重責を担ったのだ」。「私以外に誰が地獄に降り、虎穴に入るだろうか」という文革期の周恩来の言葉が、私に切々と胸に響いてくる。

同番組では、秘書だった紀東が林彪事件の際の周恩来について語っている。この事件は

今なお多くの謎を秘めているが当時、毛と周との意見は一致していなかった。秘書は、毛主席の指示に関する文書をまとめて周のベッドの脇にある机の上に置いておいた。

当時、周恩来は林彪を極左と言ひ、批判した。しかし毛沢東は、極右だと言って批判していた。周は、毛の文書を読み終わるや机を叩きつけて言った。「極左でなくなんだと言うのだ。極左じゃないか、チクショウ」と言って文書を机に投げつけ捨てたと言うのだ。

秘書は「私は初めて総理が悪態をつくのを見た。私はそっと散乱した文集を拾い集め、順序よく並べ直して元の机に置いた」と語っている。思慮深い周にも文革期には家にいて、このように感情的になったこともあったのである。

一説によれば、文革関係の資料はまだ3割は公表されていないという。また一方、中国共産党が保管してきた資料の中で一部、周恩来のイメージを損なう類いの資料はすでに処分されたとも言われている。（荒井利明著『「敗者」からみた中国現代史』）。

これからの歴史が周恩来をどのように評価するか興味はあるが、ともあれ毛沢東を補佐するような形で毛と周恩来との関係が進んでいったのである。

## 19) 周恩来外交の勝利—米中交渉から日中国交正常化へ—

林彪の反抗、ソ連の中国への干渉などの危機的な状況もあり、毛沢東と周恩来はアメリカと日本との正常な関係を模索した。その成果が、全世界を驚かしたアメリカ大統領補佐官、ヘンリー・キッシンジャーの極秘訪中だった。

したたかな外交官として名を残すキッシンジャーと周恩来の極秘会談録が残されている。その第一回の会談をじっくりと読むと、周恩来がキッシンジャーより何枚も上手であることを知ることができるだろう。

キッシンジャーは冒頭、「たくさんの人々がこの美しい、私たちにとっては神秘的な国を訪れました」と中国を持ち上げたが、周恩来はすぐさまこう答えた。

「中国が神秘的でないことは、いずれお分かりになるでしょう。もう少し馴染んでいただければ、以前ほど神秘的ではなくなるでしょう」（『周恩来キッシンジャー機密会談録』監訳者・毛里和子、増田弘）。

キッシンジャーはその後あらゆる国の政治家と会談を重ねてきたが、周恩来は中でも屈指の政治家だったと回想し、中国への畏敬の念を率直に語っている。それも周恩来の魅力があってこそとも言えるだろう。

## 20) 一番多かった日本人との会見—岡崎嘉平太氏との対話—

周恩来は日中が正常化する以前から多くの日本人に会い、会話を交わしている。たぶん外国人の中で最も多いのが日本人との会談だった。その代表的な人物が、LT貿易の名前の由来である廖承志のパートナーだった高崎達之助であり、その後の対中関係の窓口を担った岡崎嘉平太である。とりわけ岡崎は周恩来と何度も会い、深く会話を交わした仲である。その岡崎が周恩来に最初に会ったのは、1962年（昭和37年）の貿易交渉だった。周恩来

との長い付き合いを岡崎は次のように回想している。

「周総理という人は本当に立派な人ですよ。私心というものが無いんですね。常に人を立てる人ですよ」と思い出す。ある年の暮れのこと、ちょうどクリスマスの2、3日前だった。会見は終わったが、周は「今日は後にはもう客が無いから、玄関まで送りましょう」と歩きだし、「岡崎先生は仏教徒ですか、クリスチャンですか」と聞いてきた。仏教徒ですと答えると「そんなら年末まで遊んでいらっしゃい」と言う。クリスチャンならクリスマスで抜けられないと思ったのだろうと岡崎は思った。「仕事は厳しくやりますけれど、そういう暇つぶしの話なんか実に愉快な人ですよ」(『岡崎嘉平太伝』)。

ある時、覚書貿易関係で周総理に会った。このときは男性ばかりだった。周は中国側の者に、「日本の覚書貿易の事務所にはどういう人が来ているんだ。奥さん方は居ないのか」と聞いた。「奥さんも子供も来ていますよ」と言うと、「何故その人たちを呼ばないんだ、それが官僚主義だ」と叱った。その次から、周総理に会見するときには奥さんも皆行けるようになった。日本の夫人たちは大層喜んだ。岡崎は言う。「周総理というのはそういう配慮をする人です」(『岡崎嘉平太伝』)。

周恩来は、日中国交回復の日を北京で迎えるように岡崎氏を招待しろと担当者に話していた。しかし1972年9月の初めになっても手続きは終わっていなかった。周恩来はそれを知って叱り、理由を聞いたところ、「外交部の手続きがまだ終わらない」という答えが返ってきた。周恩来はその言葉を聞くと、「それが官僚主義だ、ここから電話を掛けろ、電話代は私が払う」と担当者に言った。北京の担当者はすぐ岡崎氏に電話をかけてきて、「ここで直ぐ承諾の旨言って欲しい」と言うのだった。そうして田中角栄が中国へ来る前の9月23日、周恩来は岡崎をはじめ覚書貿易を手伝った通訳の女性たちまで呼んで小さな宴会を設けその席で、「間もなく田中総理が来られ国交が回復するが、田中総理が来られたから国交が回復するものではありません。ここまで準備をするためには日本の多くの方が努力しております。我が国には“水を飲むときには、井戸を掘った人のことを忘れない”という言葉がありますが、そういう人があったから国交が回復出来るんです」と話し、今まで来た偉い人の名前を挙げた後、<あなたがたもその一人ひとりです>と言って、在席した者を讃えた。

官僚主義を嫌い、常に小さいところにまで配慮が行きとどいた周恩来ならではの逸話である。

## 21) 無私の精神と抜群の記憶力

周恩来の行き届いた心遣い、抜群の記憶力の良さは、方正日本人公墓建立のきっかけを作った残留婦人・松田ちゑさんが、文革中スパイ容疑で獄中に繋がれ、死刑を言い渡されたときにも表われている。松田さんは外国人ということもあり、死刑という極刑を科すための決裁書類は総理である周恩来まで持ち上がった。主な罪状は日本人公墓建設で主導的な役割を果たしたことだった。書類を見た周恩来は、松田ちゑさんのことをしっかりと記

憶していた。周恩来は松田さんに被せた罪名は何の根拠もなく、直ちに釈放するよう指示したのである。松田ちゑさんの息子崔鳳義さんは事件から 35 年経った 2006 年、久しぶりに方正に戻った時、当時の公安担当者からこの事実を聞かされたのだった。

前出の武吉次朗氏からも周恩来の記憶力の抜群の良さを聞いた。武吉氏が書かれた稟議書が周恩来にまで上がった。そこには、武吉氏の名前の朗が「郎」と記されていた。周恩来は決裁したとき、「郎ではなく＜朗＞の筈だ」と付記したのだ。武吉氏は、中国の関係者からそのことを聞き、「あの超多忙の方が、何回かしか会っていない外国人の若造の名前を覚えておられたとは・・・」(09 年「方正の会」講演会『中国と私』)と感激のため涙が溢れて頬を濡らしたとのことである。

このような気配りのできる周恩来の人柄を示すエピソードは限りなくあり、その多くを全て記していたら紙数がいくらあっても足りないだろう。しかしあと一つ書いておこう。

筆者も岡崎嘉平太氏から直接聞いた話でもあり、『岡崎嘉平太伝』で岡崎氏自身が語っている次のようなエピソードである。

西安事件の時、葉挺将軍が率いる新四軍と国民政府軍が共同して日本軍に当たった。しかしその後の 1941 年、国民政府軍が彼を夫人と息子とともに逮捕して重慶の牢獄に入れたが、日本との戦いに勝ち、1946 年釈放した。葉挺将軍は重慶で釈放されたが、葉挺の 11 歳になる娘の葉揚眉が延安に残っていた。

周恩来は、娘を親に会わせてやりたいと重慶に連れて行こうと考えた。当時、周恩来は国共合作後の何年間、重慶に常駐していたが、その時は日本に勝利した後で毛沢東との打ち合わせのために延安に一時帰っていたときだった。

周恩来は軍用機に乗り西安経由で重慶に戻るときに娘の葉揚眉を乗せて行く。その途中に秦嶺という山脈がある。冬にここを越えるときは飛行機の翼に氷が付いてしまい、機体が重くなりぐんぐん下がっていく。パイロットは、みんなにパラシュートを着けるように言った。周恩来ももちろん着けたが、娘は臨時に乗せたものだから彼女のパラシュートはない。娘は泣き出してしまった。すると周恩来は自分が着けているパラシュートを脱いで子供に着せてやった。

「目の前の子供が心配して泣き出せばじっとしておられないんですね。自分の命を惜しまずにやる。そこが周総理の偉いところです」。岡崎氏はそう語り、周恩来には人のために己の命をも捨てるという話は何回もあるのだと言い、「お釈迦様でもそういう経験はないんですよ」と語るのだった。

私も岡崎氏には生前 3 度ほどお会いする機会があった。岡崎氏から 1 度目か 2 度目に、このエピソードは聞いていた。最後にお目にかかったのは、20 名ほどの若いビジネスマンの集まりだった。その時も岡崎氏は、葉挺将軍の娘の逸話に触れ、周恩来を追想し涙を流されたのだった。

もう一つは長征にまつわるエピソードである。延安がある陝西省の湿地帯へ入ると、食べ物もなく、蛙を取って食べるような状況だった。そして最後は非常食を食べる。それも

無くなって、寝るときには笑い声をしていた兵士が翌朝になると死んでいたというような事態が起こりだした。周恩来は、自分の牛肉を煮て乾燥したのを水で解いてみんなに分けたが、それでも栄養失調で次々に亡くなる者が出てくる。

周恩来は、もう一つ残っているハダカ麦の粉を分けてやれと従卒に言うが、従卒はどうしてもやらない。周恩来が、どうしてやらないのかと聞くと、従卒は「これをやったら、あなたは何を食べるんですか。やれません」と答えた。すると周恩来は彼の耳元に口を当てて、他の者に聞こえないような小さな声で「みんなが生きていればこそ、私もあるんだ。一人でも兵士が生き残っておれば革命の大事が出来るんだ。私に構わずやれ」と言った。従卒はそれで泣く泣くみんなに分け与えたという。それから二日ほどしてその湿地帯を抜け、やっと人里に着いた。岡崎氏はそう語り、次のように述べている。

「これはそのときの従卒が書いた本で読んだんだから間違いありません。そういうことが、我々に出来るだろうかと思います。とにかく人が危険だとじっとしておれない人なんですね。だから皆が慕うんですよ。そんなことがいろいろあったようです。これらを全部まとめたら、論語を読むよりそれを読んだ方が将来良い子が出来るんじゃないでしょうか。私は（周総理に）会ってみてそういう気がします。常に人のことを考えている。自分のことをあまり考えない人です。だから、私の一番尊敬している人なんです。そういう場面に僕は小者だから遭うことは無いんですけども、私もよく旅行をするし、孫なんかも連れていくんですけども、今のパラシュートが無くて危ないようなことがあったらどうするだろう、自分が死ねば孫が助かるというときに、死ねるかということを幾ら考えても、こうだという自分で納得するような気持ちにはなかなか出来ない。口で言うのはやさしいけど、実際の問題としては出来ないですね」と語っている（『岡崎嘉平太伝』）。

このエピソードは1983年に発行された、阪谷芳直・載国輝らが聞き手になって伊藤武雄、岡崎嘉平太、松本重治の3人が語った『われらの生涯のなかの中国』でも触れている。それほど岡崎嘉平太にとって強い印象に残っている周恩来のエピソードである。

## 22) 消えゆく周恩来の国際主義

このように周恩来の生涯を見ていくと、彼の国際主義的な精神は、周恩来自身の生い立ち、青年時代の日本でのマルクス主義への目覚め、そしてヨーロッパで革命家として生きようとして培った思想や行動力から生まれてきたといえよう。同時に周恩来自身のもつ資質、他者に対する献身性、革命的ヒューマニズム、そして仁愛という中国的な博愛精神ともいべき思想などを周恩来の中に見出すことができるだろう。

周恩来は、対外経済技術援助に関しても次のような8原則の政策を掲げ、実行していた。

1963年12月13日から1964年2月4日まで、アフリカの11カ国を歴訪した際、ガーナのエンクルマ大統領との会談の席で、8原則を説明した。①援助は一方的なものではなく、平等互惠である。②被援助国の主権を尊重し、いかなる条件もつけず、いかなる特権も求めない。③提供する借款は無利息または低利息とし、必要なら返済期間を延長する。

④被援助国を中国に依存させるのではなく、自力更生できるよう援助する。⑤少ない投資で効果を生み、被援助国が資金蓄積できるよう、プロジェクトを選別する。⑥できるだけ高品質の設備と物資を国際市場の価格で提供する。⑦提供する技術を被援助国が完全にマスターできることを保証する。⑧中国が派遣する専門家の待遇は、被援助国の専門家と同等とする。

対外技術援助政策でもこのような国際主義的な精神が生きていたのである。果たして現在の中国政府はどうであろうか。

このように実践していた周恩来でも、文革時代には「心にもないこと」をしなければならなかった。いわば苦渋の選択である。しかし周恩来の行動によって文革の被害（人的なものから文物に至るまで）が極力抑えられたという事実は、中国の多くの人々が認めるところではないだろうか。

それでも文革がもたらした傷が本当に、中国の人々の中から消えるには3世代を経てからだといわれる。とすれば100年経ってようやく傷が消えていくことになる。今からおよそ60年後にやっと、肉親が受けた傷の記憶も遠のき、中国の人々の心の底から文革の傷が消えていき、文革が本当に歴史の対象になるだろう。

その時、周恩来が持っていた国際主義的な精神が中国内でどのように変化しているだろうか。これについては悲観的にならざるを得ない。

すでに村田忠禧氏（横浜国立大学名誉教授）が指摘しているように、江沢民が主席として登場以降、中国から国際主義という言葉が減少し、愛国主義が頻繁に出るようになった。ここ10年、「国際主義」は「人民日報」の社説からも消え、語られることはない。

「人民日報」という党中央の機関紙はいわば中国共産党の本音の部分を表すものではなく、どちらかと言えば、建前を語る側面がある。ということは本音の部分でも、一部の良心的な古参党员以外の多くの共産党员にとっては、「国際主義」はもう遠い過去のものになっているとっていいだろう。

（おおい・よしひろ：1944年大阪市で生まれ京都府（現在の城陽市寺田）で育つ。中学生時代より東京に在住。著書『ある華僑の戦後日中関係史』（明石書店刊）、論考に「水稲王 藤原長作物語—中国の大地に根づいた日中友好の絆」などがある。本会事務局長）

## 方正日本人公墓が私たちに問いかけるもの

### ——「方正友好交流の会」へのお誘い——

1945年の夏、ソ連参戦と続く日本の敗戦は、旧満洲の開拓団の人々を奈落の底に突き落としました。人々は難民、流浪の民と化し、真冬の酷寒にさらされ、飢えと疫病によって多くの人々が方正の地で息絶えました。それから数年後、累々たる白骨の山を見た残留婦人がなんとかして埋葬したいという思いは、県政府から省政府を経て中央へ、そして周恩来総理のもとまでいき、中国政府によって「方正地区日本人公墓」が建立されました。中国ではまだ日本の侵略に対する恨みが衰えていない1963年、中国政府は、中国人民同様わが同胞の死も、日本軍国主義の犠牲者だとして手厚く方正に葬ってくれたのです。日本人開拓民たちのおよそ4500人が祀られているこの公墓は、中国広しといえどもこの方正にあるものだけです。（黒龍江省麻山地区でソ連軍の攻撃に遭い、400数十名が集団自決した麻山事件の被害者たちの公墓も1984年に建立され、この方正の地にあります）

この公墓の存在は、私たちの活動もあり徐々にではありますが、人々に知られるようになりました。民族の憎悪を乗り越えて建立され、中国の人々によって管理維持されている公墓の存在を、更に多くの人々に知ってもらおう。「愛国主義」ではなく、民衆レベルでの国際的な友愛精神を広めていこうと設立したのが「方正友好交流の会」です。当会の前身は1993年に設立され、2005年6月に再発足し、日中友好の原点の地ともいうべき「方正」に光を当てたいと活動しております。

個人会員 一口 1,000円 団体・法人会員 一口 10,000円

（口数は最低一口、上限はありません）

### 方正友好交流の会

101-0052 東京都千代田区神田小川町3-6（社）日中科学技術文化センター内

電話 03-3295-0411 FAX 03-3295-0400 E-mail: ohruai@jcst.or.jp

郵便振替口座番号 00130-5-426643 加入者名 方正友好交流の会

HP アドレス : <http://www.houmasa.com/>

## 《報告》

## ありがとうございました

前号の会報 21 号入稿後、2015 年 12 月 7 日以降にカンパをお寄せいただいた方、また新たに会員になられた方々のお名前を以下に記して感謝の意をお伝えします。ありがとうございました。(敬称略、受け付けた順に記載しました。2016 年 4 月 20 日現在)

木村麻由美 田平正子 島隆三郎 貞平浩 毛利悦子 榎戸吉定 岩増弘三 岡崎雄児  
肥後茂樹 大西広 山内良子 園木宏志 内山則男 阿久津国秀 小柴玲子 NPO 法人  
やまなみ 小出公司 可児力一郎 宮田一郎 上条八郎 滝永登 芹澤昇雄 仰木忠幹  
三井汎 遠藤勇 下山田誠子 小玉正憲 飯牟礼一臣 久保和男 篠田欽次 古賀勇一  
欄京子 武吉次朗 杉田春恵 松島赫子 馬場永子 小畑正子 渡辺一枝 及川淳子 辻  
康子 照山真木子 藤原作弥 矢吹晋 田澤仁 木戸富美江 山吉昭三 佐藤千栄子 坂  
本睦郎 高木凉子 井出正一 瀧亀久男 小岩井孝 上西隆全 手塚登士雄 山田敬三  
山川梅子 天竺桂尚穂 村田吉隆 黒岩満喜 河野通威 金丸良平 篠原淳子 正田昌晴  
千田優子 羽田澄子 高田京子 岩崎スミ 高橋かよ子 奥田俊夫 宮原成太郎 大島満  
吉 白西紳一郎 石原健一 篠原国雄 望月迪洋 石橋辰巳 金倉美佐恵 田口良一 飯  
沼信彦 堀泰雄 吉光寺ヒロ子 伊原忠・泰子 鳥島せい子 新田百合子 久保孝雄 荒  
川幸二 高橋健男 松田信義 吉川健 望月信隆 吉川孝人 間瀬藤江 斎藤敏文 長塚  
淑江 伊藤光子 野崎朋子 小林淨子 深山信雄 澤田武彦 皆川純磨 名取敬和 馬場  
信韶 芳賀英吾 金丸千尋 前田滋子 鶴沢弘 野口武 澤岡泰子 今村隆一 鈴木幸子  
近藤耀子 山田浩 長谷部照夫 藤村光子 山極晃 石田和久 遠藤滋 新谷陽子 高橋幸  
喜 村田和代 吉岡孝行 水野瀧子 小関光二 藤井正義 韓応飛 山下美子 広田彰夫  
矢島敬二 酒井武史 島辰夫 高部明敏 林郁

.....

## 書籍案内を兼ねた編集後記

大類 善啓

### 『中国帰国者をめぐる包摂と排除の歴史社会学

—境界文化の生成とそのポリティクス』(明石書店刊)

3 月に入って南誠さんから上記の大著が送られてきた。

南さんのお名前については、本誌の創刊号あたりから読んでいる方には記憶もあるだろう。当会の発足時点から理事として活動しており、2006 年 3 月に発行した『星火方正』2 号に「方正訪問記—『方正日本人公墓』と私—」という文章を書いている。

寄稿してくれたその旅は、麻山事件で母や妹、多くの知人を失った婦人との旅でもある。麻山事件で生き残った同行の彼女は中国人の養女になった。その旅を終えて南さんはこう記している。

「あっという間の旅であった。旅の思い出の重みは時間の長さをはるかに超えている。その後、私はそれをどう消化していけばいいのかについて考え込んだ。しかし、その答えは決

してすぐに出ない。おそらく、そのための旅は今後も続く。それは公墓と出会った私にかせられた課題であり、満洲開拓民だった祖母を持つ私の宿題でもある」

南さんは1976年、中国残留日本婦人の孫として中国黒竜江省で生まれた。本書は、中国帰国者のひとりとして自己を見つめつつ、中国帰国者を包括的に分析し研究し論じている。なにぶん大著であり、短い文章では全体を紹介できそうもない。

筆者もこの大部の著作を読む時間もなく、南さん自身に本書を紹介してもらおうと思ったが、本人も中国から帰国して忙しい故、このような形で本書を紹介している。

書名及び目次を見ると、学術論文であり難しそうであるが、第2部の〈表象／実践編〉では、「中国残留日本人」はどのように語られているか、テレビのドキュメンタリーなどを紹介しながら論じているので、こちらの方から読むのもいいと思う。

### 『満洲国留日学生の日中関係史—満洲事変・日中戦争から戦後民間外交へ』

(勁草書房刊、浜口裕子著)

この書は本来なら前号で紹介すべきだった。2015年10月に刊行された本書の著者は、1953年生まれ、慶応大学大学院博士課程を卒業後、現在、拓殖大学政経学部教授である。

本書は、戦後の日中の民間外交を担い、国交正常化に大きく貢献した満洲国留日学生に焦点を当て、新たな日中関係史を描いている。

拙著『ある華僑の戦後日中関係史』(明石書店刊)で取り上げた韓慶愈(本会顧問)さんと、韓さんの東京工業大学の先輩に当たる孫平化氏の二人の軌跡を、“満洲国”の対日留学政策を論じつつ紹介している。ぜひ一読してほしい。

### フィリピン・ミンダナオ島からの引き揚げ

寄稿してくれた丹野雅子さんは、私の趣味の一つであるタンゴのレコード・CD鑑賞会の仲間である。たまたま鑑賞会後の二次会で話したら、南方から引き揚げてきたという。引き揚げというと今の私には、中国大陆からということが当然のように頭を占めていて、丹野さんの話を聞いて、改めて、日本の敗戦後にはさまざまな引き揚げ体験があったのだと思った。

本誌に掲載されている原稿は主に、中国東北部からの引き揚げが中心になっているが、中国大陆に限らず、今後も敗戦前後の人々の歩みを少しでも伝えていければと思っている。ますます右傾化という紋切型のフレーズを超えて進行する日本の現状を見るにつけ、若い世代に伝えるべきことは多いと思う。ぜひ、いろいろな体験をお寄せいただきたいと思います。

.....

《表紙写真撮影：寺沢秀文》

『星火方正～燎原の火は方正から～』(第22号) 2016年5月7日発行

発行：方正友好交流の会 編集人：大類善啓 Email：ohrui@jcst.or.jp

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-6 日本分譲住宅会館 4F

(社)日中科学技術文化センター内 電話：03-3295-0411 FAX：03-3295-0400

郵便振替口座番号 00130-5-426643 加入者名 方正友好交流の会

HP アドレス：<http://www.houmasa.com/>